



君津市三通貝塚遠景（南から）



同（北から）

第3回最新出土考古資料巡回展に伴う講演会の記録集

目次

- 1 はじめに
- 2 講演会記録
 - (1) 開催挨拶
 - (2) 三直貝塚発掘調査中間報告
 - (3) 縄文の大土木工事

1 はじめに

最新出土考古資料巡回展は、平成8年度から隔年で実施している事業で、県内各地の遺跡から出土した遺物などを県民の皆様方に御覧いただき、埋蔵文化財に対する理解を深めていただくことを目的に、千葉県文化財センターをはじめとする県内10法人によって組織される千葉県文化財法人連絡協議会と、開催博物館によって実行委員会が設けられ、展示資料の選定から資料の集荷・展示と一連の展示作業を行っている。

第1回の巡回展は、平成8年6月から9年2月まで、県立中央博物館をはじめ、県立博物館5館と松戸市立博物館など6館の博物館を巡回し、4万人以上の県民の皆様方に御覧いただいた。第2回の巡回展は、平成10年6月から11月まで、県立大井町博物館をはじめ、県立博物館5館と袖ヶ浦市郷土博物館・市立市川考古博物館など7館の博物館を巡回し、4万人近い県民の皆様方に御覧いただいた。第3回の巡回展は、平成12年7月から13年1月まで、県立房総風土記の丘をはじめ、県立博物館6館を巡回し、4万人以上の県民の皆様方に御覧いただいた。

巡回展に伴って、講演会を計画し、その時々興味ある講演をその分野の第一人者である研究者にお願いして実施した。また、巡回展を中核展示として、市立博物館ではその地域の特徴ある遺跡の出土遺物を中心とした地域展示が行われ、地域と密着した展示会も行われた。

第3回となる今回の巡回展では、連絡協議会10法人の他、流山市教育委員会から三輪野山遺跡の資料出品を得て、23遺跡から出土した遺物760点の展示を行った。展示資料は旧石器時代から室町時代まで幅広い時代の遺跡から出土した遺物の中から、特に貴重なもの

を厳選し、速報コーナーでは新聞などで大きく報道された君津市三直貝塚を取り上げ、出土したばかりの出土品を展示した。講演会は、平成12年12月23日に県立中央博物館講堂において、「君津市三直貝塚の調査」発表と「縄文の大土木工事」と題する講演会を開催し、200人に近い県民の皆様方の来場を得て、講師の興味ある内容を長時間にわたり御静聴いただいた。

3回にわたる巡回展は、のべ12万人以上の多くの県民の皆様方に御覧をいただき、出土品をとおして埋蔵文化財に対する理解を深めていただけたのではないかと考えている。

2 講演会記録

(1) 開催挨拶

松崎勝美（当文化財センター常務理事）



今日は、年末の非常にお忙しいなかにもかかわらず、大勢の皆様方に御参加いただきまして、誠にありがとうございます。

千葉県文化財法人連絡協議会を代表しまして御挨拶を申し上げます。千葉県文化財法人連絡協議会と申しますのは、県内に千葉県文化財センターをはじめ、市町村で組織いたします10の文化財センターがございます。それら10の法人で組織します団体でございます。

御承知のように埋蔵文化財の発掘調査・研究、そして普及活動を行っております。県民の皆様方に埋蔵文化財をより御理解いただくため、毎年1月の遺跡調査研究発表会などをおして、発掘調査の成果を発表し

ているところでございます。

今、この中央博物館の2階の企画展示室で、最新考古資料巡回展「地中からのメッセージ」と題しました展示を行っております。既に御覧になった方もいらっしゃると思います。まだの方には帰りがけに御覧いただければと思っております。この展示会は今年で3回目を迎えます。今年は7月に県立総南博物館を皮切りに六つの博物館で展示を行って参りました。この中央博物館が今年度最後の展示会でございます。

県民の皆様方に、新聞報道されました貴重な出土品を御覧になっていただく、ということを中心に展示会を行っているところでございます。その巡回展の最後の締めくくりとして、本日、展示に関連いたしました講演会を企画し、開催いたしているところでございます。

今回の巡回展では速報コーナーとして、昨年7月から千葉県文化財センターが調査を行っております君津市三直貝塚を取り上げて展示をいたしました。三直貝塚につきましては、本年の3月の新聞報道でも大きく報道され、注目を集めましたことは皆様方既に御承知のことと思います。つい先日も新聞報道されましたように、三直貝塚の調査もかなり進んでまいりまして、いろいろなことが明らかになってまいりました。そのようなことから本日、この調査報告を行うとともに、盛土遺構に関連したテーマの講演会を行うところでございます。

盛土遺構につきましては、全国に幾つかの例が紹介されておりますけれども、本県でははじめての例ではないかと思っております。

本日は、これから三直貝塚の中間報告と、それが終わりましたから三直貝塚をはじめ、同じような盛土遺構につきまして、縄文時代の研究で御活躍されております市立市川考古博物館長の堀越正行氏により「縄文の大土木工事」と題しました御講演を予定しております。盛土遺構について、どのようなお話をされるのか非常に興味がございます。遺跡の本質に迫るお話が聞けるのではないかと、そのように期待をいたしております。

どうぞ皆様方には埋蔵文化財につきまして、今後とも御理解をいただき、御支援、御協力を賜りますようお願いを申し上げます。講演会に先立ちまして、簡単ではありますが御挨拶とさせていただきます。

ありがとうございました。

(2) 君津市三直貝塚の調査

吉野健一（当文化財センター研究員）



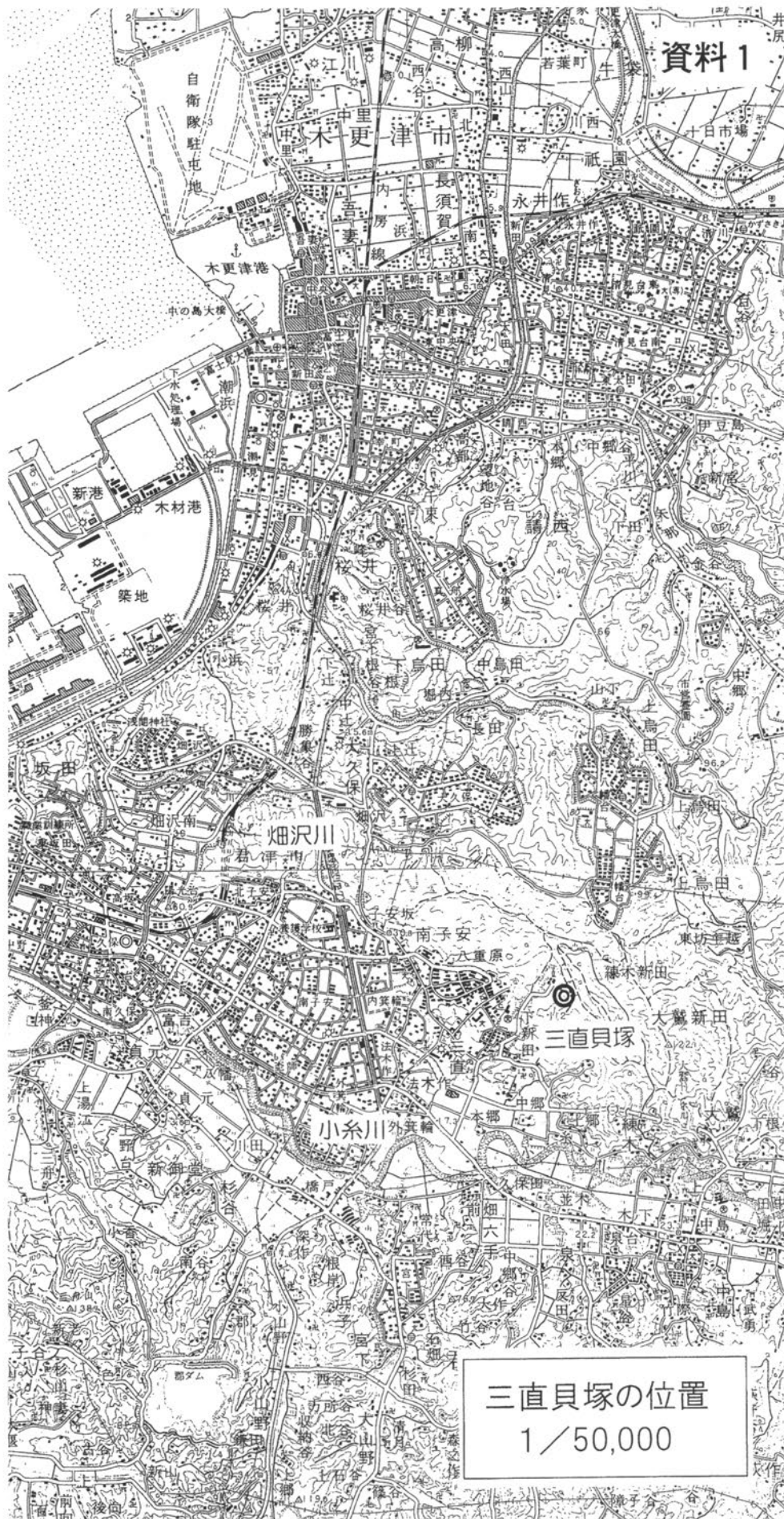
ただ今御紹介いただきました、千葉県文化財センターの吉野です。これから短い時間ですが、三直貝塚の調査概要を説明したいと思いますので、よろしくお願い致します。

まず、遺跡全体の概要を説明して、それからスライドを使って調査の様子などを説明していきたいと思えます。

三直貝塚は、縄文時代中期の後半から晩期の前半、今から4,500年から3,000年前にかけて営まれた集落遺跡です。調査は館山自動車道の建設に伴って、平成11年の7月から行っております。調査対象範囲は9,130m²で、遺跡全体から見れば、半分から3分の1ほどの面積です。

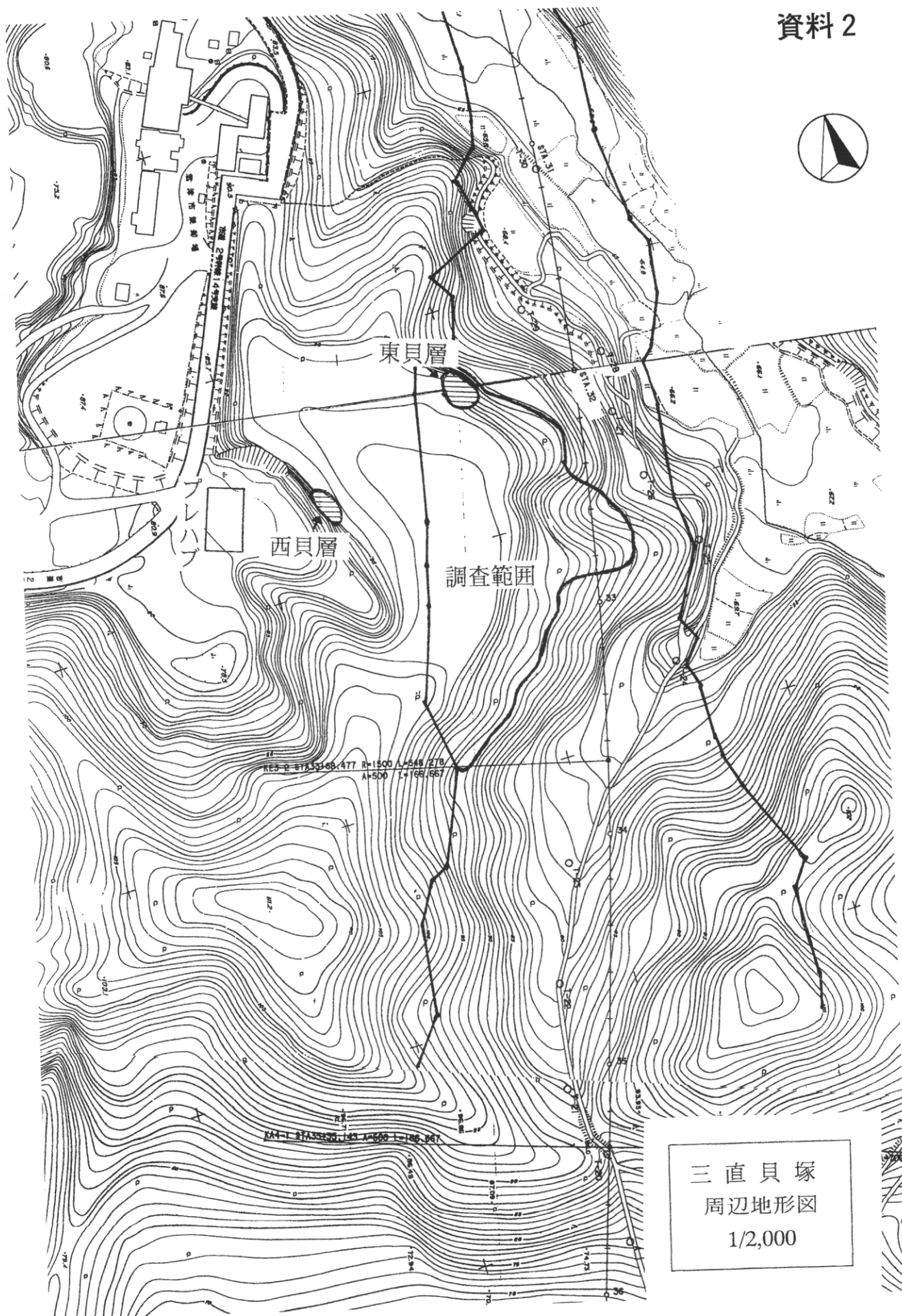
次に遺跡の位置についてですが、資料1（39頁）に5万分の1の木更津市から君津市の地形図があります。図の南東のあたりに三直貝塚があります。三直貝塚は、東京湾に流れ込む畑沢川と小糸川という二つの河川に挟まれた分水嶺に位置するという地形的な特徴があります。現在の海岸線からの距離が約7kmあり、標高は約100m弱です。遺跡の東側に面する谷には水田が見られますが、その水田との比高差は約35mです。

資料2（40頁）の図を見ていただきますと、遺跡周辺の地形がわかると思います。図に示した部分が今回の調査範囲です。この範囲の西側にも遺跡が広がっています。遺跡の西側には、細長く入り込んでいる谷状の地形が見られますが、戦後の土取りのために削られた部分はかなりあって、本来の地形がどのようなかにはわかりません。しかし遺跡のある平坦な部分は谷頭を囲むように分布していたのではないかと考えております。



資料 1

三直貝塚の位置
1/50,000



三直貝塚
周辺地形図
1/2,000

三直貝塚遺構配置概念図

2000年12月の様子



資料3(41頁)を御覧ください。最近の三直貝塚の全体図です。丘陵の平坦面の縁辺に沿うように盛り上がっており、これが環状盛土遺構の盛土部分です。今回の調査は、盛土遺構の東側2分の1を調査していることとなります。「中央凹地」と記してある部分が、中央の凹んでいる場所で、そこを中心にして盛土遺構が巡っております。そして盛土遺構の上に縄文時代後期中頃から晩期前半にかけての住居などの建物が分布しています。

それでは調査の内容をスライドを使用して説明して行きたいと思えます。

〈スライドの説明〉

- 1) これは三直貝塚の調査開始直後の写真です。北側から撮影をした写真で、一番手前の斜面に貝層があります。丘陵の縁辺に高くなっているところが展開し、右側の中央凹地に向かって次第に低くなっています。盛土遺構の上には確認グリッドがあり、遺物が出土しているのが分かるかと思えます。この確認グリッドの先が遺跡の中でも最も高くなっていて、調査開始直後から盛り上がり方が確認されていたところでした。始めは古墳ではないかと考えて、墳丘を断ち割るための確認トレンチを設定して、様子を探ろうと思いましたが、実際は古墳時代の遺物は出土しなくて、トレンチの深いところまで縄文土器が大量に出土した事から、縄文時代の盛土遺構の可能性が高いのではないかと判断したという経緯があります。これが今年の秋の様子です。
- 2) この写真は今年の2月頃、現地説明会の前後位の写真です。全体に表土を除去して盛土遺構の上面を検出した状態です。写真中央が黒くなっていますが、ここが中央の凹地で、この周辺が盛り上がっているのが分かるかと思えます。田んぼの畦のようなものは、私たちが調査の時に土層の確認をするためのもので、縄文時代の人々が造ったものではありませんので、あらかじめお断りしておきたいと思えます。写真手前に貝が散布しているのが分かるかと思えます。
- 3) これが今年の夏頃の状況です。盛土遺構を掘り下げていったところ、写真左端の辺りでピット群(柱穴群)がたくさん検出されています。その左上に炉があり、住居跡などが写し出されています。
- 4) これは三直貝塚の北側に所在する練木遺跡から三直貝塚を撮影した写真です。三直貝塚の後ろ側に山

が見えますが、このような地形が君津地域の特徴的な丘陵の形といえます。それに対して三直貝塚が位置する部分は、上面が平になっており、極めて特殊な景観であることがわかります。

- 5) この写真は中央の凹地から盛土部分を撮影したのですが、このような状態で遺物が出土します。
- 6) この写真は南側から北側の高まっているところを撮影したもので、断ち割るような形でトレンチが掘られています。
- 7) ここは先ほどのトレンチの南側の地点です。盛土を掘り下げていったところ遺物が集中して出土して、丸く黒い染み状のものが見えたので、住居ではないかと考えて調査を開始したところでした。
- 8) これを掘りあげますと、このようになりました。柱の穴はしっかりしておりませんが、こういったプランで径2m前後の堅穴状の掘り込みになりました。さらにその下に、黒い染み状のものがあって、別な遺構があるということがわかりました。
- 9) これは6)で示した土層断面を観察するためのトレンチで、このロープで示した範囲に、住居の床面が確認されている。現地表面から1.2mから1.5mくらいの深さがあります。今、丁度黒土の所を広げているような状態ですが、このような丸い落ち込みが確認されて、そこに遺物が集中して出土しています。その下の埋まっている住居までは深さが1m以上あります。
- 10) この写真は、掘りあがった状況を撮影したものです。このような形で、丸い住居のような掘り込みが検出されました。明確な炉は確認されていませんが、焼土のブロックのようなものが何か所か確認できて、底面はところどころ硬化しております。さらに、広げて掘ったところ、時期としては縄文時代後期中頃から後期の後半ぐらいの時期の遺構が2から3基くらい重なりあっている状態で確認されました。
- 11) 写真右上に確認トレンチがありますが、先ほど10)の住居が見つかったところとは反対のところを見た写真です。
- 12) この盛り上がった所を掘り下げたところ、遺物が出土し、その下から著しく焼けた土が出土しました。この焼土は面的に広がっていて、四角形の焼土や炭化物の集中地点であることが確認されました。
- 13) この写真はその反対側から撮影したものです。このような床面が著しく焼けた四角形の住居跡であ



1)



5)



2)



6)



3)



7)



4)



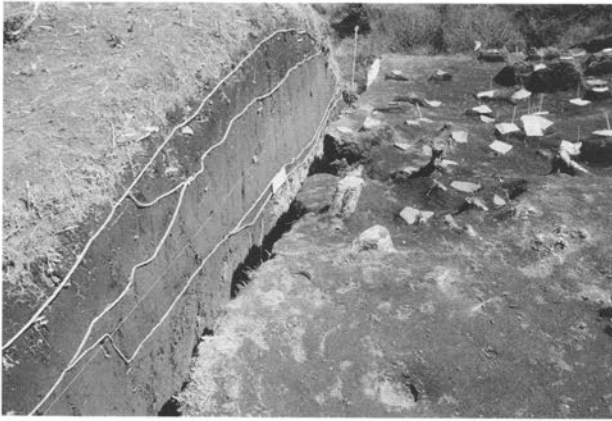
8)

ることが分かりました。セクションベルトの上が元の表土の面で、この厚さが50cmほどあります。

- 1 4) この住居跡の焼土や炭化物を取り除いたところです。壁際に柱穴が巡っているという状態がわかるかと思えます。
- 1 5) これは床面付近の状況で、全面に焼土や炭化物が多かったのですが、写真中央に炉のようなものも確認できました。
- 1 6) この住居の床面にもう一つ別の四角い住居のコーナーと思われるものが見つかったので、そのプランを確認して掘り上げたところ、新たに壁際に沿って焼土と炭化物の塊が帯状に巡る住居が姿を現しました。
- 1 7) これは完全に掘りあがった状態です。この住居も2軒重複していて、やはり壁際に柱穴が巡っています。また、中央の木株の右下に見えるのがこの住居の炉跡で、深く掘り込まれています。
- 1 8) 資料の中にある大型住居です。長径が11mあります。後期から晩期の集落を調査すると、こういった大きな住居跡が何基かまとまって出土するということがありますが、これはこのような例なのではないかと考えています。柱穴が多数あるのは、何度も建て替えが行われているためです。
- 1 9) これは大型住居の調査中の写真です。遺物は床面近くからだけ出土して、覆土の上の方からはほとんど出土しません。また、出土する遺物のほとんどが破片ばかりで、完全な形をした土器などはほとんど出土しませんでした。
- 2 0) 大型住居の土層断面です。現地表面近くから1m以上にわたって均質なソフトロームのような黄褐色の土が堆積しています。その下の、床面近くには、炭化物と焼土が混じった黒い土が10cmほど堆積しています。住居が廃棄された時に何か燃やしたりした後に、黄褐色土を集中的に埋めたのではないかと考えております。
- 2 1) 北側のところに張り出しがあって、そこが入口施設です。その部分の土層断面で、黒色土と黄褐色土が交互に堆積しているのがわかるかと思えます。建て替えの度に入り口を造り替えたことを示しているのだと思えます。
- 2 2) これはベルトを取り除いた状態の写真です。入り口が、北側(写真の上方向)と西側、それからその間の合計3か所見つかっております。立て替えの度に家の方向を少しずつ替えているためにこのよう

な状態になっているのだと思えます。

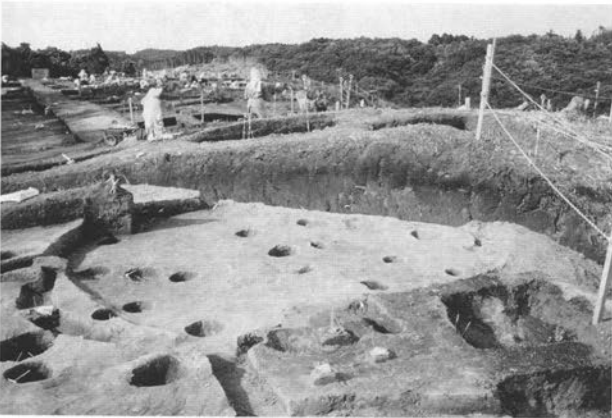
- 2 3) これは今年の夏頃に撮影したもので、南側から盛土遺構と大型住居の関係がわかる写真です。大型住居のサイズがわかると思えます。
- 2 4) 大型住居の遺物出土状況で、これは異形台付土器です。
- 2 5) ミニチュアの皿状の土器の出土状況です。直径が約5cm程度のものです。
- 2 6) 床面から出土した耳飾りの出土状況です。大型住居からは、これらのような特殊な遺物が多く出土する傾向があります。
- 2 7) これは、これまで説明してきた大型住居の北側に位置する大きさ9m程の住居です。先ほどの住居と比べると小さいのですが、普通の住居が5mから6mですから、かなり大きな住居です。プランは四角で、入り口施設が1か所見つかっています。
- 2 8) この写真は、この住居の土層断面です。覆土の上の部分盛り上がっているのがおわかりいただけると思えます。この住居も先ほどのものと同様に黄褐色の土で一気に埋められており、埋めた土の上の面が盛り上がっています。壁の高さが約30cmであるのに対し、中央あたりでは盛土は1mほどになります。この上の面には炭化物を含んだ暗褐色の土が堆積しており、縄文時代晩期の遺物がまとまって出土していて、何らかの生活の痕跡であると思われる。このように、盛土の上で再び住居などが営まれて、それがまた埋められるという行動のくり返しによって盛土が高くなっていったという一面が見られます。
- 2 9) 先ほどの住居のさらに北側ある晩期の住居跡です。写真中央やや右側に炉があります。写真ではわかりにくいのですが、この下に黄褐色土で埋められた大きさが10mを越える深い住居跡があります。
- 3 0) 大型住居が並ぶ地点の北側に行きますと、盛土の上や盛土を取り除いた下にはこういったようにピットが密集する様子が広がっております。おそらくこれは住居を含んだ建物の柱の穴であろうと考えています。
- 3 1) これは南側の斜面の堆積状況の空中写真です。土層断面を観察するためのベルトを残して掘っています。約2.5mの厚さに縄文時代の土器を含む土が堆積しています。
- 3 2) これは、土層断面の写真です。深さが2.5mから3mほどあります。下の方に見える黒色の土層は、



9)



13)



10)



14)



11)



15)



12)



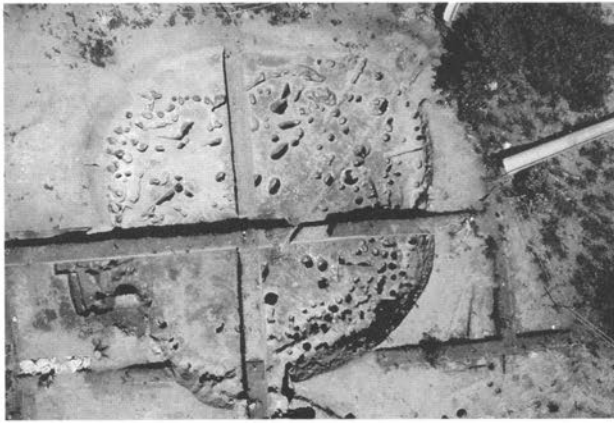
16)



17)



21)



18)



22)



19)



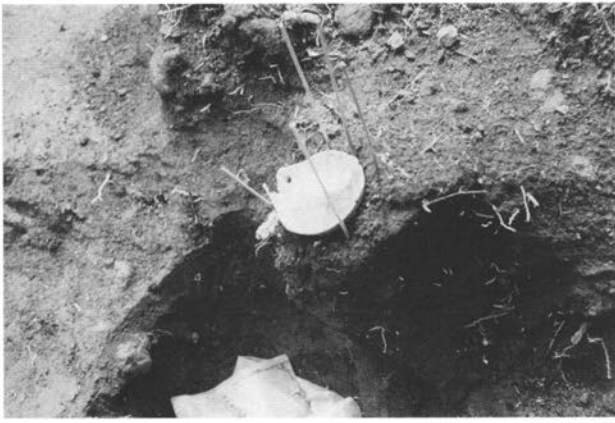
23)



20)



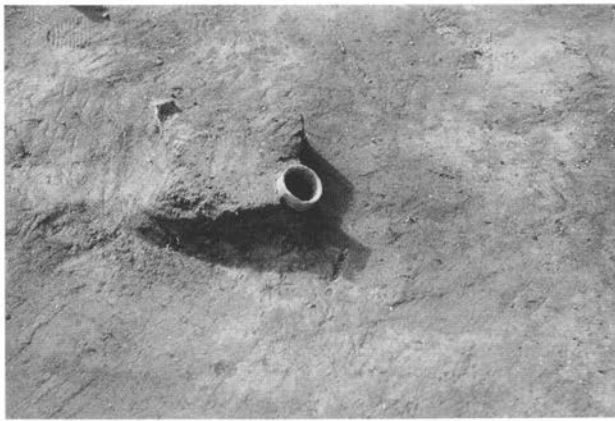
24)



25)



29)



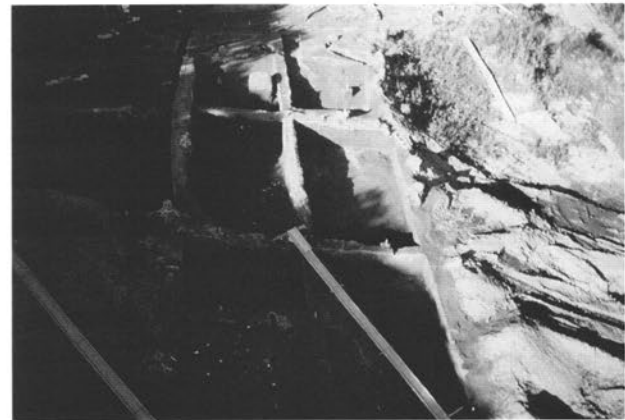
26)



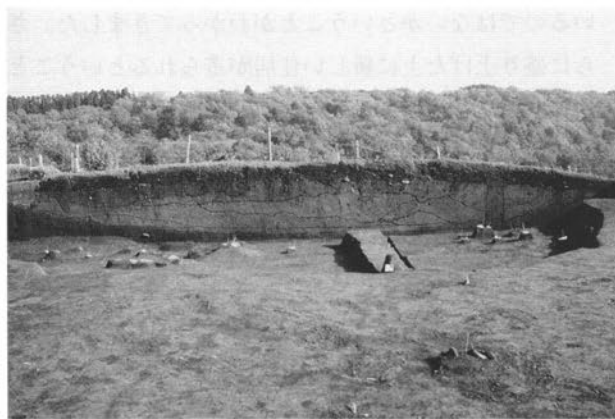
30)



27)



31)



28)



32)



33)



35)



34)



36)

スライド説明写真5

本来の表土層だったと思われます。その上にハードロームのブロックを主体とした土が堆積していて、その層から上の土層には土器が多く含まれています。特にロームブロックを主体とした層からは完形に近い土器がまとまって出土します。この土器の時期は後期の前半で、盛土遺構の時期よりも古いものです。

33・34) 南側の斜面からは、このように大きな土器が出土します。これは口径が40cm以上もあります。これらの土器は、ほぼ完形のまま上から投げ込まれて、土圧で潰れたような感じで出土しています。

35) この写真の住居跡は、盛土遺構の時期とは違いますが、中期の後半の4,500年前の時期の住居です。丸い形の住居で、壁際から7点の石棒が並んで出土しています。このような出土状況は、県内にあまりないのではないかと考えています。一番大きいものは、長さが95cmで、頭が両方に付いています。1点が立って出土した他は、壁に沿うように寝ていました。

36) この住居には、入り口のあたりに埋甕がありますが、この写真は、入り口の方から、埋甕、石棒を覗いたものです。

以上でスライドは終わります。スライドで調査の概略を簡単に見ていただきました。その中で大型住居が埋められていた土を見ていただきましたが、あのよう、住居を廃絶した直後にローム質の土で一気に埋めて盛り上げたことが、盛土が形成される一因になっているのではないかとわかってきました。さらに盛り上げた上に新しい住居が造られるということが何度かくり返されるということも確認されてきています。

三直貝塚における環状盛土遺構と呼んでいるものは、集落の形成や営みと密接な関係があるものなのではないかと考えています。

以上で発表を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

(盛大な拍手)

(3) 縄文の大土木工事

堀越正行氏（市立市川考古博物館長）



ただ今御紹介いただきました堀越と申します。よろしくお願いたします。

今日は、「縄文の大土木工事」というテーマをいただきましてお話するわけですが、私は土木の専門家では決してございませんで、なんで私がやらなくてはいけないのかと思ったぐらいです。けれども、この問題については、特に専門の人がいるわけでもありませんし、私自身そういう遺跡の発掘をしたこともないわけですが、幾つか遺跡を見学したことがあるにすぎません。三直貝塚を見せていただいて、今まで発掘された遺跡と比較しながら、紹介させていただく程度ならばと、お引き受けした次第です。

土木工事ということを辞書で引きますといろいろと書いてあるんですが、資料に書いてありますように土と木というのが材料でございませんで、それに石が縄文時代の場合には加わるといことで、そういうものを使って施設を造る工事が土木工事である、というのが辞書的な定義です。

実際縄文時代に堅穴住居というものが普及するわけですが、それ自体土を掘ったり木を切ったり、柱を立てたり、屋根を造ったりといことで、大小の差はございませんで土木工事であるわけです。それを逐一あげていくと行きがございませんで、主なものにしぼらせていただきます。まずは建物系のお話からさせていただきます。

建物で一番大きいもの、ギネスブック的なものになってしまうわけですが、これまでに発見された堅穴住居で一番大きいものはどこかを調べましたところ、図①の山形県米沢市一ノ坂遺跡のようです。前期初頭といことで今から6,000年くらい前です。長さ43.5m、短辺が3 m40cmから4 m10cmのちょっと歪

んでいますけれども草鞋をさらに延ばしたような、あるいはうなぎパイのような格好の家が出ております。炬が6基といことで昔流に言えば六軒長屋といことになろうかと思ひます。その土の量は約40m³といふうに概算ですけれども計算されました。例えば関東地方の堅穴住居、直径5m、深さ50cmといものをこれからの一つの目安と考へてみたいと思ひますけれども、それを計算すると、土量が約10m³といことになります。しっかりした堅穴住居になりますが、一ノ坂例はその約4軒分の土量を掘って一軒を造っているといことになります。

図②は、北海道南茅部町大船C遺跡とい遺跡。こちらの方は、深さが2mを超える大型堅穴住居が十数軒出ているといことでございませんで。こちらについては未だ報告書は出ていないと思ひます。その中で、図の真ん中よりちょっと右上のところに、矢印と星印がついておりましたが、それが一番大きい住居のようで、深さ約2.4m、長辺約9mの楕円形の堅穴住居といことです。これもざっと計算いたしますと約110m³といことで、さきほどの約10m³が1軒分とい計算でいきますと11軒分の土量を掘りあげて堅穴住居を造っています。中期の後半といませんで、こちらでいませんで加曾利E式とい時期になりますけれども、そういう住居が密集しているのが大船C遺跡です。北海道の南茅部町といませんで、函館よりも東北の方向の噴火湾沿岸とい位置になります。そういう大型の、特に深さが、私などが手を上に挙げても届かないような深さを持っている住居が発見されておりました。

いままでが建物系ですが、つぎに巨木系の土木工事の例として図③の石川県金沢市チカモリ遺跡とい例がございませんで。図にありますように直径7mの円形に10本の巨木を立てるといものです。その巨木といませんで直径70から90cmの太さの栗の木を半裁しまして、切った面を外側にして円弧の部分の内側に向けて立てるとい、この場合は南側に門扉も備えるといものでございませんで。時期は縄文時代晩期です。これについては屋根があるか、壁があるかなどいろいろ意見も出されていませんで、現状では柱を立てただけの外が丸見えの環状の木柱列として復元されておりました。これについては高さがどの程度あったかについては特に科学的な推定がされていませんで。環状木柱列で囲まれた場所が果たして人が踏み込んで儀式をやる所なのか、あるいは禁足地であったのかわかりませんで、聖域がこういったものによって仕切られているとい例

になります。

その次に図④の青森県の三内丸山遺跡。これについてはもう既に、現地を見学されている方がこの中にたくさんいらっしゃると思います。この図は大林組のプロジェクトチームが出しました案で、屋根付きの案でございまして、現状ではこの屋根がない柱と床がある復元案で造られております。この図は1/200の図になっておりますので、脇に人が立っておりますが、身長150cmの人がそこに立っているということで二百倍すると実物大になりますので、後で家に帰ってから二百倍にさせていただければと思います。長辺8.4m、短辺4.2mの間に六本の柱が長方形に並んでいるというものでございます。実際には上は発見されるわけではないわけですが、下の部分は、地面より下の部分が出ております。直径2m20から2mぐらいの穴、深さもだいたい同様2m以上の深さをもって、直径1m～80cmの栗の太い巨木がそこに据えられていたというものでございます。柱の下の部分をはずして荷重を計測したところ、1m²当たり16トンという重さがかかっているということが分析によってわかったということです。そうしますと、栗の木の比重でいきますと16mの長さになるということから、地中に2m入れているわけですから、地上部分は14mの柱が立っているということになります。

その柱自体は1本当たり4トンという計算がされているようですが、これも大林組のチームの計算ですと、一人当たり30kgを引っ張る力とすると、100人程度が1本の柱を引っ張って立てるには必要だったというふうに計算されております。ついでに、柱を立てた穴の土量を計算しますと、一本につき約8m³で、これが6本ございますので48m³ということで、先程の標準的なといいますか計算上の数字の約5軒分の竪穴住居を造る土量をこの掘立柱の建物を建てる時に掘りあげているということでございます。

写真の1(67頁)は諏訪大社の上社の御柱です。三内丸山のものに比べると、ずうっと細いんですけども、現在も4本、これが立てられていて、巨木系の信仰の現在に伝わっている姿と考えるとよろしいかと思えます。県内でも、それらしきものがないことはないと思えますけれども、三直貝塚ではこういう高い大きい柱を立てたという例は出ていないようです。こういうものも縄文遺跡にあってもおかしくないと思えます。

以上が巨木系例としたものでございます。

それから図⑤の北海道苫小牧市静川16遺跡。今度は

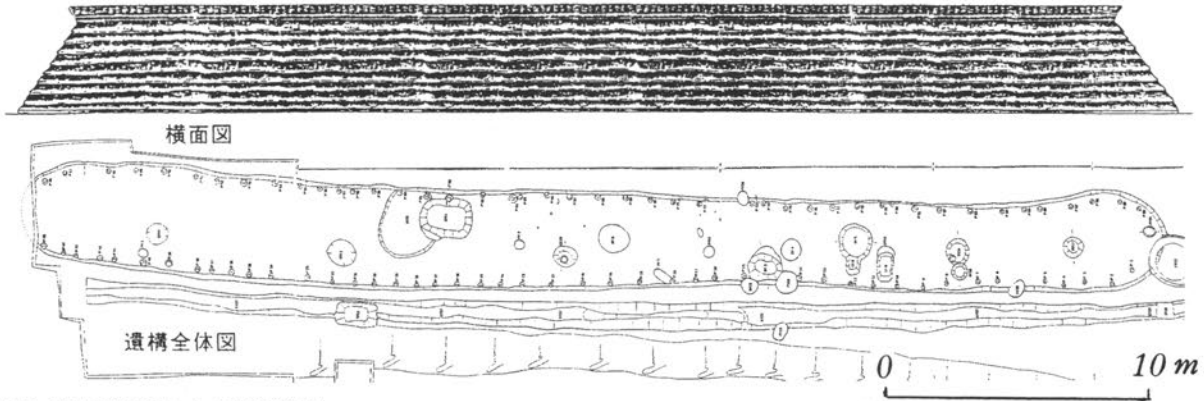
溝系になります。お城ではないんですけども溝を掘るということが縄文時代にあるということがわかったのはつい最近のことです。静川16遺跡は環濠とかいろいろな名称がありますが、私は区画溝の方がよろしいのではないかとこのように思っております。そこにあります65m×45mの瓢箪形のをぐるっと弥生時代の環濠集落の溝のように巡らしているということでございます。時期は中期末から後期初頭といえますから約4,000年前ということになります。3か所掘り残しがあるという点でも環濠に似ているわけですが、この中から竪穴建物が2軒、右側のほうが古く、左側の方が新しいというふうにいわれておりますが、しかし炉はなく柱穴も不明確で、遺物もほとんどなく、生活臭の非常に乏しい建物であるというふうにいわれております。調査者の見解によりますと、祭りや儀式などというような共通の祭祀の場ではないかというのがこの区画溝の中の空間の評価とされております。これも概算で計算をしましたところ、掘削の土量が244m³ということで、竪穴住居を考えますと24～25軒分の土量をこれによって排出しているということでございます。

その次に図⑥の北海道千歳市の丸子山遺跡という、区画溝の遺跡でございます。三角おむすび形をしております。左側の静川16号遺跡と同じスケールになっておりますので、大きいほどがおわかりになるかと思えます。こちらについては溝が途切れる部分がたくさんありまして、土量計算が概算では極めて困難だということでやめました。しかし、静川16号遺跡の24～25軒分以上の土が排出されています。この内部には遺物はあるんでしょが遺構はないといわれております。ですからよくわからない施設であるということになるわけです。こんな実用的ではないものに大量の労働力を使っているということが一つあるという例として御紹介いたしました。

次、検討項目がダブっていますが、図⑦は秋田県鷹巣町伊勢堂岱遺跡。大館能代空港のある鷹巣町になります。これも右側の端に環濠と書いてありますように、調査では環濠と呼んでいるようですけれども、私は区画溝に改めております。方形の区画溝が巡っていますが、かなり途切れている部分がございます。これについては、この夏に見に行ったんですけども、既に調査が終了していて、遺ってはいますが、立ち入ってすぐに見られる状況にはないということで遠目で見ただけでした。特に縄文時代であるということを確認

①山形県米沢市一ノ坂遺跡 — 大型竪穴住居跡（長さ日本一）

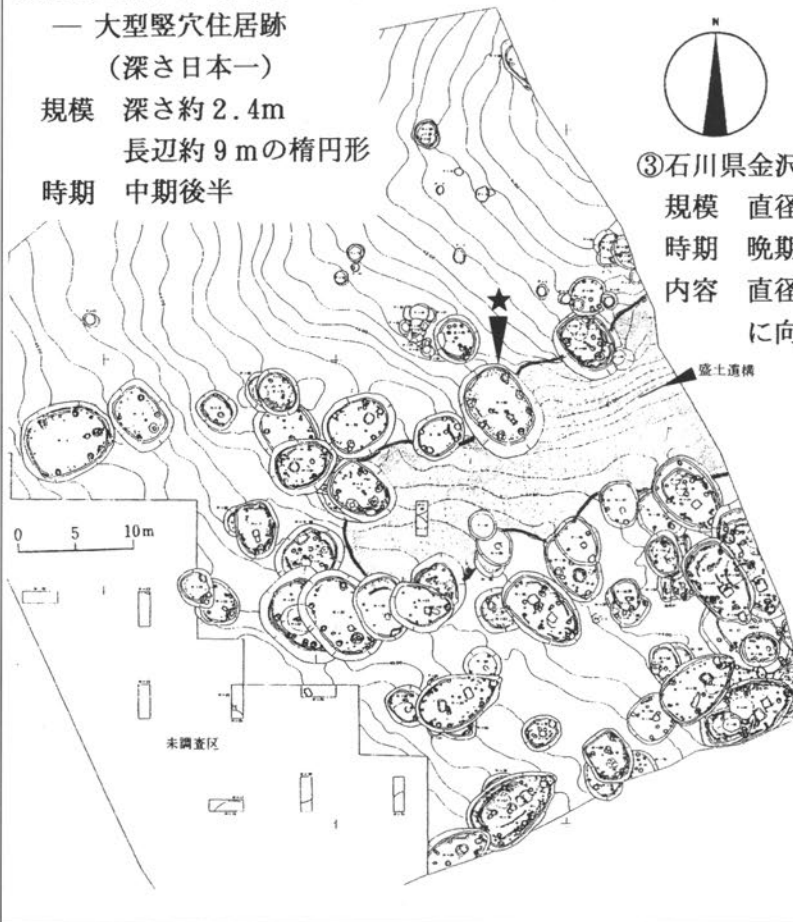
規模 長辺約43.5m 短辺約4.1~3.4m 深さ21~28cm 床面の差25cm 炉6基
 時期 前期初頭



②北海道南茅部町大船C遺跡

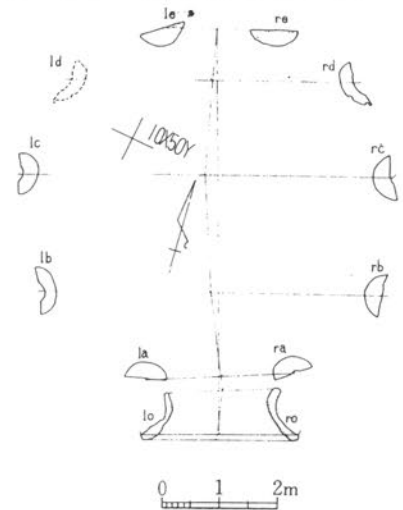
— 大型竪穴住居跡
 （深さ日本一）

規模 深さ約2.4m
 長辺約9mの楕円形
 時期 中期後半



③石川県金沢市チカモリ遺跡 — 環状木柱

規模 直径約7mの円形に木柱を10本立てる。
 時期 晩期
 内容 直径約70~90cmの栗材の半断面を外
 に向けて立てている。門扉も備える。



づけるものは何も出なかったようで、諸状況から消去法で縄文時代の可能性が大であるということがございます。ですからこれについては？というふうについていいかと思えます。そういう溝の例が北海道から東北部にあるんだなあということで、これがどの程度南下するかということについては未知数です。

その次に図⑧、同じ遺跡ですが、伊勢堂岱遺跡。環状列石で有名になったんですけども、その地図の左

側の方に環状列石Aと書いてある矢印の打ってあるのがそれです。長径30m、短径25mということで、やや小ぶりの環状列石になります。先ずお墓を掘って埋葬をしてそれらがあつた程度終わった後に、配石をしているというお話を聞いております。Aが完掘され、Bが一部出ている。CがAの南側になります。この夏にはここを掘っていました。内帯、外帯に分かれていて、いろいろな色の石が見られます（写真の2）（67頁）。

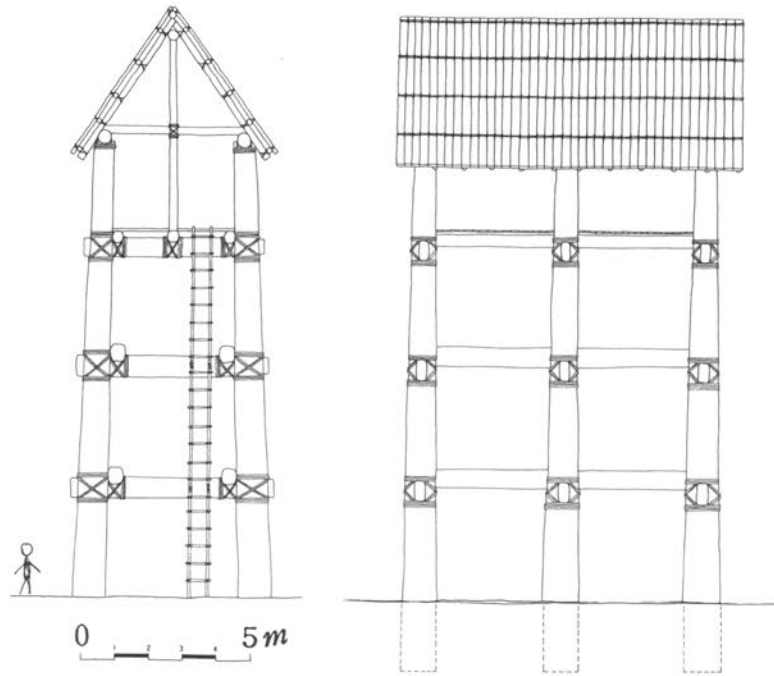
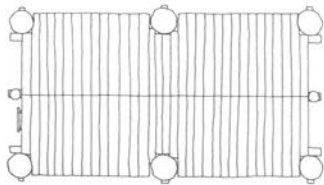
④青森県青森市三内丸山遺跡

— 大型掘立柱建物

規模 長辺 8.4m・短辺 4.2m
の 6 本柱（心々寸法＝柱
と柱の間隔はすべて 4.2
m） 直径 2.2～2 m・
深さ約 2.8～2 m の穴に
直径 1～0.8m 前後の栗
の巨木を立てる。

時期 中期前半

内容 柱下土壌の荷重分析＝
16 t / m² ⇒ 木柱の長さ
16m = 高さ 14m の建物。



大林組プロジェクトチーム案
(板葺き切妻屋根高層建物)

⑤北海道苫小牧市静川16遺跡 — 区画溝

規模 長径約 65 m 短径約 45 m 全長 138.5m のひょうたん形 上幅 2 m 前後
底幅 30～50cm 深さ 2～1 m 橋状掘り残し 3 か所

時期 中期末～後期初頭

内容 台地の付け根側は回し、台地縁は下側を掘り、先端は掘らない。共同祭祀場というが遺物
無し。内側に竪穴建物 2 軒あるが、炉は無く柱穴も不明瞭。



⑥北海道千歳市丸子山遺跡 — 区画溝

規模 長径約 70 m 短径約 60 m 全長約 170 m の三角おむすび形
上幅 2.5～1.5m 深さ 1.8～1 m 橋状掘り残し 10 か所以上

時期 中期後半

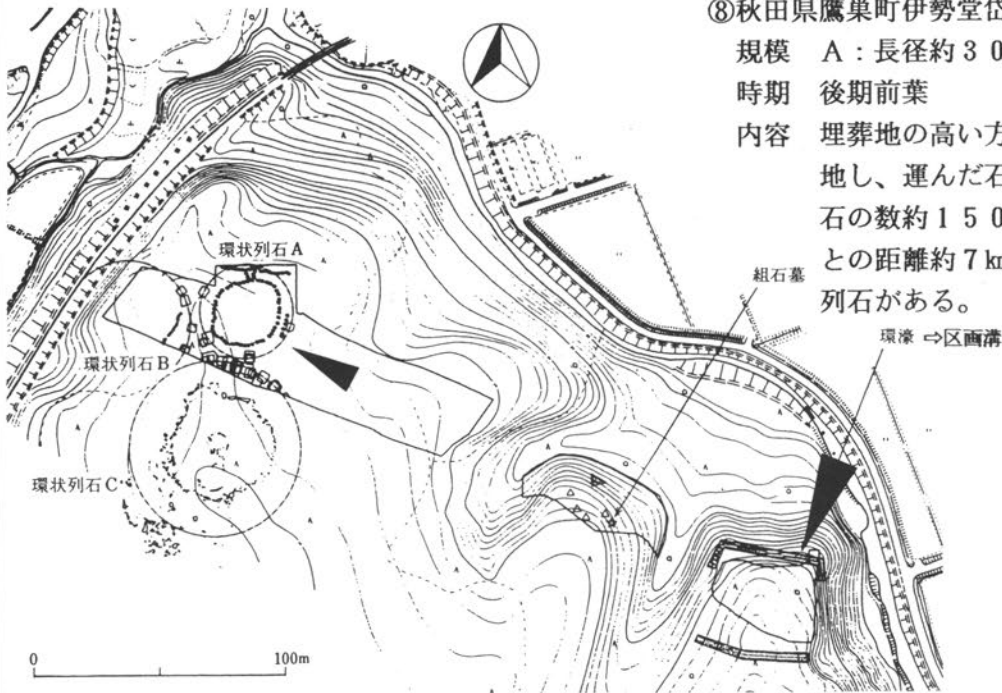
内容 台地の付け根側と台地左右縁は連続性良く掘るが、先端は疎ら。内部に遺構無し。

⑦秋田県鷹巣町伊勢堂岱遺跡 — 区画溝

規模 径40m前後の方形区画

時期 縄文時代? (溝・区画内に遺物の出土はなく、諸状況から消去法で推定)

内容 台地付け根を掘り、側縁は掘らず、先端は下側をかすがい状に掘る。



⑧秋田県鷹巣町伊勢堂岱遺跡 — 環状列石

規模 A: 長径約30m 短径約25m

時期 後期前葉

内容 埋葬地の高い方の斜面を削って整地し、運んだ石を配置している。石の数約1500個、採石想定地との距離約7km 最低4基の環状列石がある。

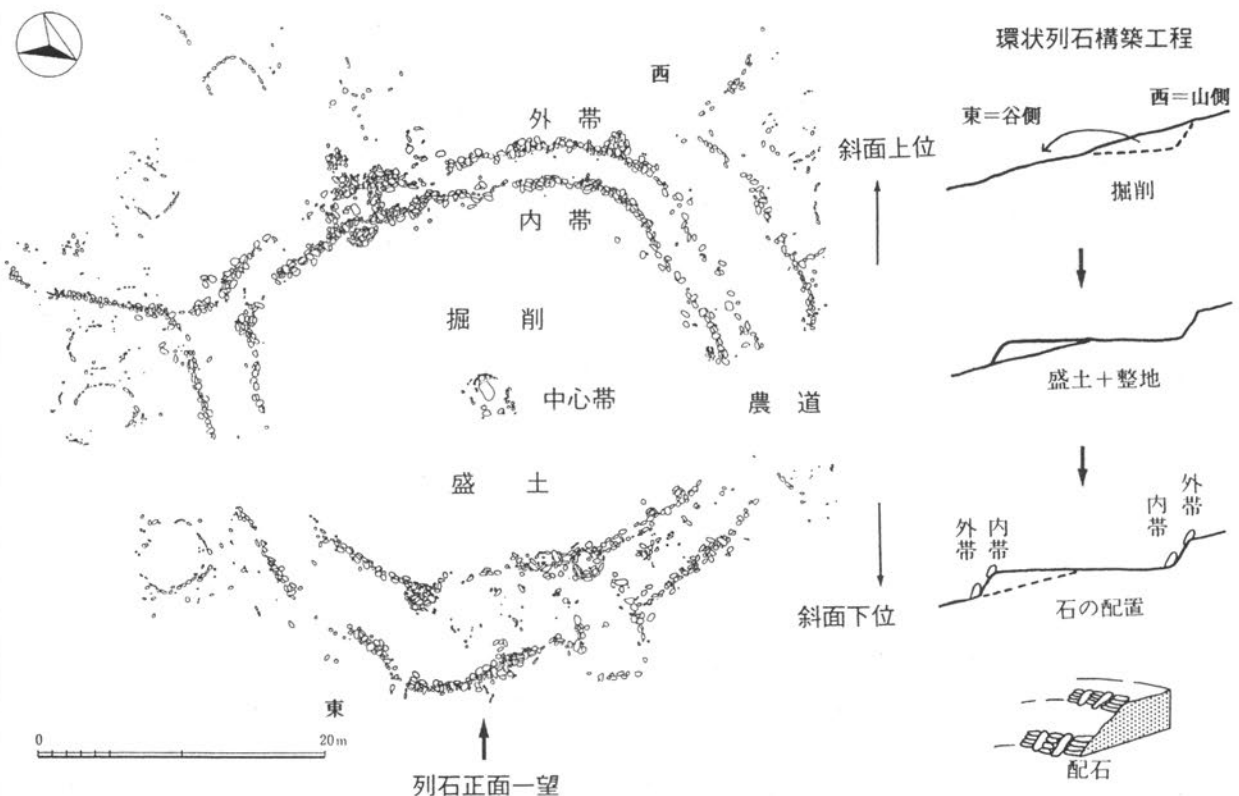
⑨青森県青森市小牧野遺跡 — 環状列石

規模 外帯径約35.5m 内帯径約20.0m

中央帯径約2.5×1.5m

時期 後期前葉

内容 西側の斜面を削り、東側に盛土して整地し、運んだ石を配置。石の数約2000個、採石想定地との比高差約60m・距離約500m



さらにその南側に、Dというのが林の中にありますが、秋田杉の林になっていて、なにかシンとした不気味な場所であったんですけれども、環状列石が更に南側に続いています。この環状列石ですけれども、やはり、造るに当たっては、削平・平坦化、という工事をしており、さらに使っている石が7kmぐらい離れたところでないとは採れないということが、現在の状況からいわれています。縄文時代の河原の位置がはっきりと確かめられているわけではございませんので、現在の採れる場所からの距離ということでございます。7kmの道程を山の上の方までもってくるということでは造られているということをお聞きいただければと思います。

その次に図⑨の青森市小牧野遺跡（写真の3）（67頁）。これは青森空港の比較的そばの、八甲田山の方に入った所になります。左側の方が平面図で右側の方に断面図がございます。その断面図を見ていただくと、先ず傾斜地、実際にはなだらかな斜面になるんですが傾斜地の山側の方の土を削りまして、谷側の方に盛土をするということで平らな面を造るという、そういう雛段の部分ができた後に段の側面に配石をしているという環状列石となっております。ですから山側の方から見ますと石がよく見えなわけですけれども、谷側の方から見ますと手前の下の段と遠い部分の上の段の二列の配石が、ぐるっと見渡せるということで、この左の図では列石正面一望というふうに矢印で書いてありますけれども、正面を意識した環状列石がここでは造られています。右側の方に段々下がってきて左側の方にいくと段々と、山の方の高い方に行きます。正面一望という字の位置は荒川という川が流れている谷の斜面に落ち始める所ですから、配石を見上げるようになるわけです。そのように大規模に整地して、これも比高差60m、距離で500mの位置から石を運んで土木工事を行っているという例であります。もう少し東側の所を今年度青森市の方で発掘して、小さな列石が見つかったり、あるいは竪穴住居のようなものが出ているということです。

それから図⑩秋田県鹿角市大湯遺跡。大湯の環状列石として有名な遺跡でございます。図は現在のもっと周囲がはっきりした図ではなくて、一昔前の古い図を使わせていただきました。今の図を使いますとそれだけでページいっぱいになってしまいます。メインは石の方ですので、発掘がかなり進む前の図で十分だからです。左側が西側になりまして、万座の環状列石、右

側が東側で野中堂の環状列石でございます。万座の方が大きくて直径48×42mと、後期前葉ですから4,000年より気持ち新しいという時期になります。石の数約5,000個が万座に使われているといわれています。また、採石想定地から約7km離れているということです。伊勢堂岱も小牧野もそうですが、環状列石の近くにはその当時の集落はないということが共通しております。ですから違うところにある集落から採石地に持ってそれを7km離れたこの場所に持って行って段々配石を完成させるという作業を行っているということになります。実際の石の数は約5,000個ということですから、昔はもっとあったというお話をお聞きいたしました。

ですから、かなりここにあります量よりも多い石が昔はあったと理解していただきたいと思います。大湯の場合は緑の石を選んで持ってきていて、伊勢堂岱の方はカラフルないろいろな石があるのとは違っていますが、大湯の方は99パーセントは石英閃緑玢岩という、グリーンストーンが使われています。今は色あせて黒くて黴が生えている感じですが、一部洗浄したのを見せていただきますと、非常に綺麗な緑色で、昔は緑の石がぐるっとまわっていたことを想像していただきたいと思います。なお、環状列石の外側には四本柱の建物がぐるっと巡るということで、復元されていますが、どうも住居ではないらしい、もがり屋なんでしょうか、そのようなものが巡っています。先程の伊勢堂岱遺跡の場合も同様だということです（写真の4）（67頁）。

それから図⑪北海道小樽市忍路遺跡。これも環状列石になります。列石といっても高さ1m程度の石を、むしろ横に寝かせるのではなくて、立たせているという、いわば環状立石といった方がいいのかもしれませんが、石が内側に少しあって外側にぐるっと回るといって、大湯とはだいぶ雰囲気が違う例になります。これは後期の後半ということでございます。山側の斜面を削って谷側を盛って平らな面を造り、採石推定地の忍路湾という海がございますけれども、日本海側になりますが、そこから7km石を運んでいます。すぐそばに忍路土場という、いろいろな木製品がたくさん出た遺跡がございます。また、忍路遺跡の西へ500m行った所に地鎮山という標高100mの山があります。この山の上に地鎮山巨石記念物と呼ばれる摩訶不思議な遺跡があります。巨石というべき高さ1mほどある大きな石が12個巡っております。直径10mの範囲に巡らしてお

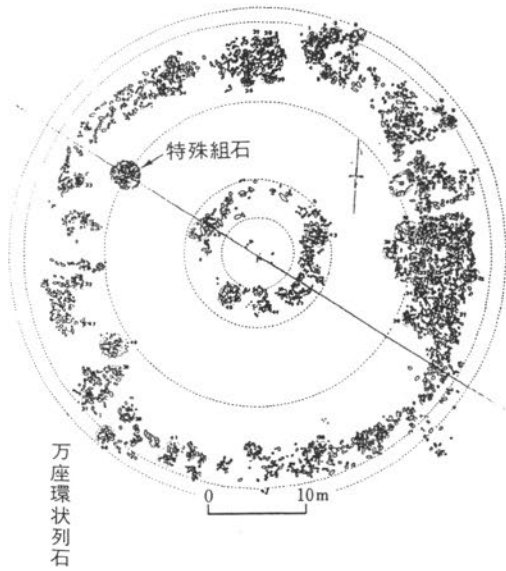
⑩秋田県鹿角市大湯遺跡

— 環状列石 (万座・野中堂)

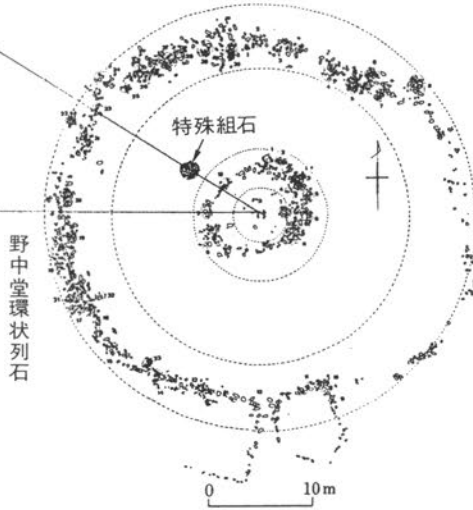
規模 万座直径約4.8m 野中堂直径約4.2m

時期 後期前葉

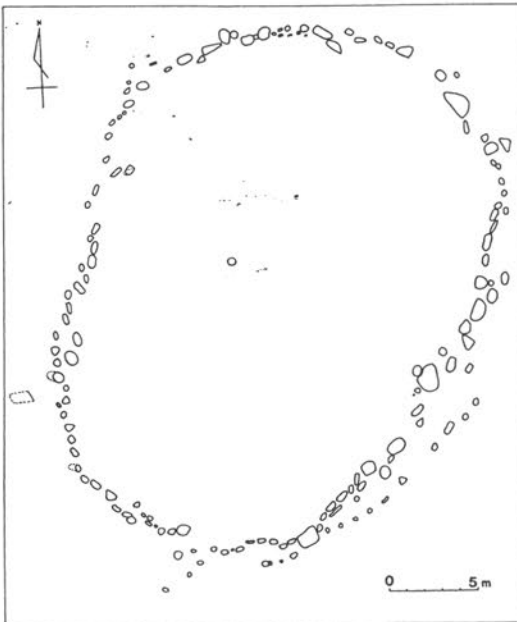
内容 埋葬後に運んだ石を配置した墓地造成。
万座の石の数約5000個、採石想定地との距離約7km



万座環状列石



野中堂環状列石



⑪北海道小樽市忍路遺跡 — 環状列石

規模 長径約3.3m 短径約2.2m

時期 後期

内容 山側の斜面を削り、谷側に整地し、運んだ石を配置している。採石推定地の忍路湾との距離約7km。

⑫北海道千歳市美々貝塚北遺跡

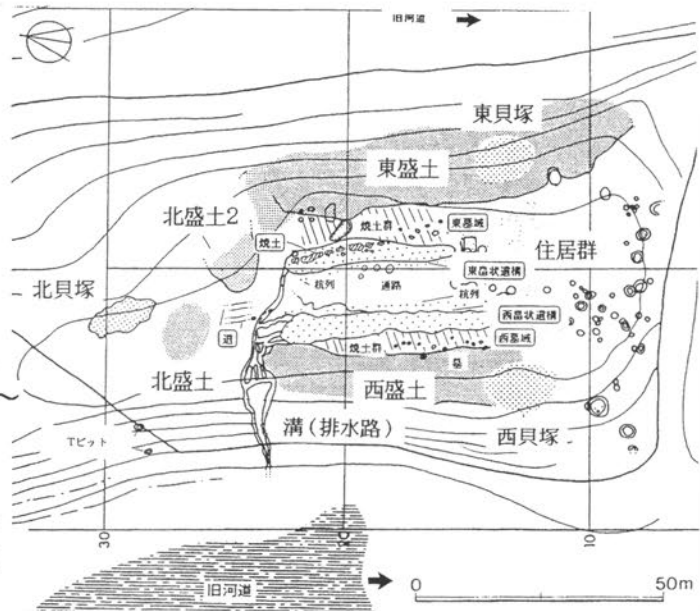
— 二列並行帯状盛土と地点盛土

規模 西盛土：長さ5.5m 幅約1.0m
厚さ約0.6m

東盛土：長さ7.5m 幅約1.2m
厚さ約1m

時期 前期前半

内容 丘陵中央を削平し盛土。石器・焼骨多数。住居・墓は別。貝塚は盛土と同じ位置。



り、この下に2m四方の深さ90cmの方形の穴が掘られておりまして、そこに河原石が敷いてあります。掘った時はこのような石が上にかぶさっていたといわれております。遺物はこのときは出土していませんが他の遺跡の例から、縄文時代後期の遺構ではないかということです。ここは一人でいったんですけれどもシーンとした不気味な場所でした。多分私は、ここでたくさんの人を埋葬して、骨にしていたんだろうと思えますけれどもはっきりとわかっておりません。

以上列石系の代表的な遺跡を御紹介いたしました。配石がどのぐらいの人数でどのぐらいの日数がかかるかについては、今回は省略させていただきました。

次に盛土系の遺跡について紹介いたします。

図⑫の千歳市美々貝塚北遺跡という例でございます。

こちらの方も正式な報告書がないもので、概要がちょっと紹介されている程度であります。前期の前半といえますからかなり古い時期になります。尾根状の台地の上の部分を平にして、その平らにした土を東西と一部北側にも2か所点々とあるようですが、盛土して斜面との境にして、その中に集落を造るという例でございます。こちらの場合、三直貝塚の場合は北斜面にあるということでございましたけれども、盛土の中にといいますか、盛土と一体化して貝が捨てられて、貝塚を形成しているという例でございます。焼いた骨などがたくさん出ております。住居とか墓とかは盛土より内側になるということでございます。ですから住居を盛土の上に設けるといことのない例ということになります。あくまでも集落を設営するときの削平土を寄せたという盛土の遺構になるのではないかと思います。

その次に図⑬秋田県森吉町狐岱遺跡。これもまだ報告がありません。集落内にL字状の盛土をしております。ちょっとわかりにくいのですが、左側の下の所に右から左に下がる斜線が引いてある蛇のようなものが寝そべておりますが、それが2か所に別れた盛土遺構になっております。こちらは前期の終わりということですから5,000年よりちょっと古い頃という時期になります。その盛土は、全長約390m、幅10から20m、高さ80cmから1.5mといわれております。こちらの場合にはトレンチ調査ということですが盛土の部分から竪穴住居が多数見ついているということでありまして、三直貝塚の一番近い例ということになるかと思えます。遺跡は階段状になっているということ

で、段と段の間の部分の斜面にいろいろな遺物の捨て場が形成されています。

その次図⑭、御承知の青森市三内丸山遺跡。現在も発掘調査が続いております。北の盛土、南の盛土がこれまで知られていたわけですが、縄文時代のいずれも中期ですが、その西側に谷の中から西の盛土が見つかっています。こちらの場合は整地、それから竪穴住居などを造るときに排土、そういったものを同じ場所に盛ってできているというふう考えられております。中期にめいっばいということで1,000年近く断続的に盛っているということになるかと思えます。この盛土については円筒式の土器が大量に出たり、特に装身具や土偶がたくさん見ついているわけですが、住居は見つからないということで、排土の山がそこにあったと考えられるわけですが、ただの排土ではないということでございます。遺跡に立ちますと、黒い部分が盛土、赤い部分は削られて地山が出ている状態がわかりますが、縄文時代もおそらくこのような景色だったと思います。

その次に図⑮岩手県一戸町の御所野遺跡。これは現在発掘調査が終わりまして環境整備事業が行われております。この夏に行ってきましたが、環境整備を行うということは、50cmから1m50という厚さで、遺跡全体を盛土しますので、発掘している部分とはしっかり行かない感じがします。図の中央で十の字が斜めになっている模様の部分に配石遺構群と書いてありますが、丁度集落の中心部分にお墓を造っているわけですが、その場所を削平して、少し窪めて平らにするわけですが、その余った土を南側の部分に弧状に盛土をするという例でございます。この盛土からいろいろな遺物もたくさん出ています。お墓と盛土を囲んで住居の帯がぐるとC字状に回り、さらに東側西側にも集落があるという、そういう例であります。実際には70cmぐらいが一番厚いということで、低い盛土になっております。この例は、中期後葉ですから、三直貝塚で石棒が竪穴住居から見つかったという例がありますが、それより気持ち古い時期になるかと思えます。

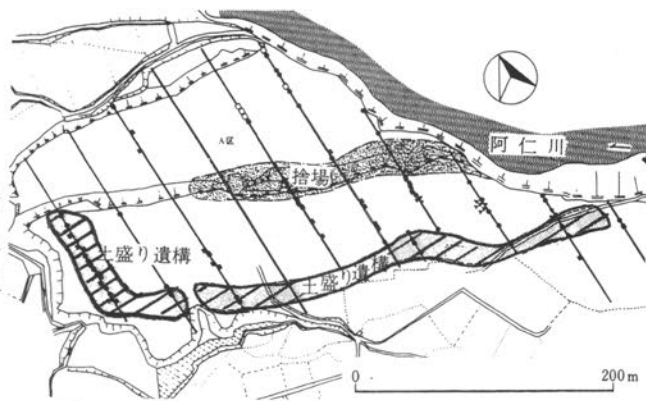
その次に図⑯の北海道函館市石倉貝塚。これは函館空港の滑走路の延長工事が現在進められておると思えますが、その工事に先駆けて発掘調査した所でございます。右と左と図が別れておりますが同じものなんです、全体の概念図が左になります。ドーナツ状で何か所か切れている部分、黒い部分が盛土の遺構、それから白く内側に内帯部という部分がありまして、さ

⑬秋田県森吉町狐岱遺跡 — L字状盛土

規模 全長約390m 幅約10~20m
厚さ約0.8~1.5m

時期 前期末

内容 盛土のトレンチ調査で多数の竪穴住居跡、土坑、埋設土器、遺物を発見。上位段丘面の西側~南側に盛土。下段丘面との比高差4~6mの境は捨て場。



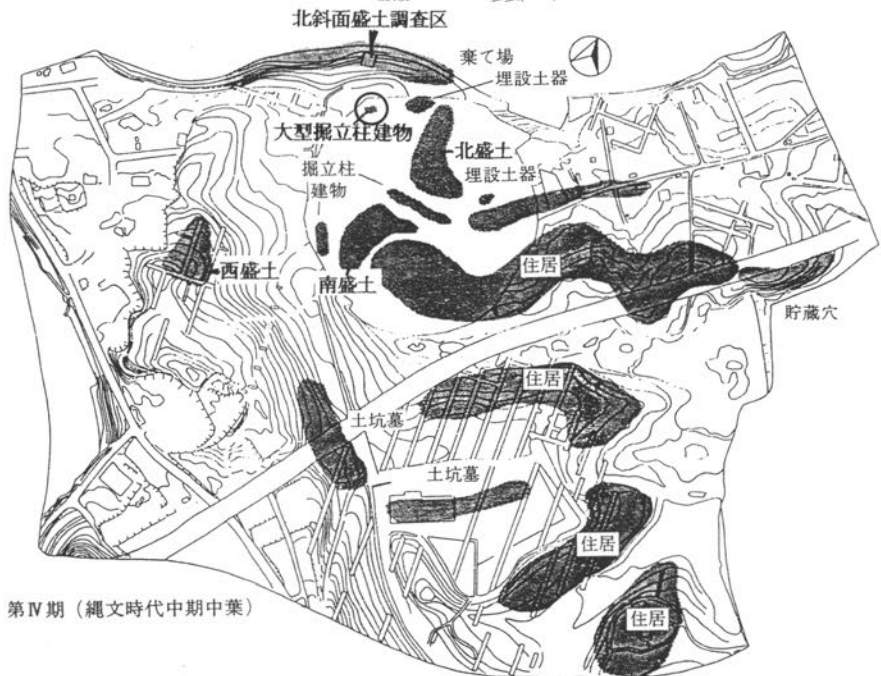
⑭青森県青森市三内丸山遺跡 — 弧状盛土 (北盛土・南盛土・西盛土)

規模 南盛土:

南北約80m
東西約50m
厚さ約2.8m

時期 中期初頭~中期末

内容 整地と掘削の排土・灰・焼土・土器・石器などで南北平坦地と西の谷に盛土。水平に堆積しており、常に整地していた。土偶・翡翠多し。盛土に住居無し。



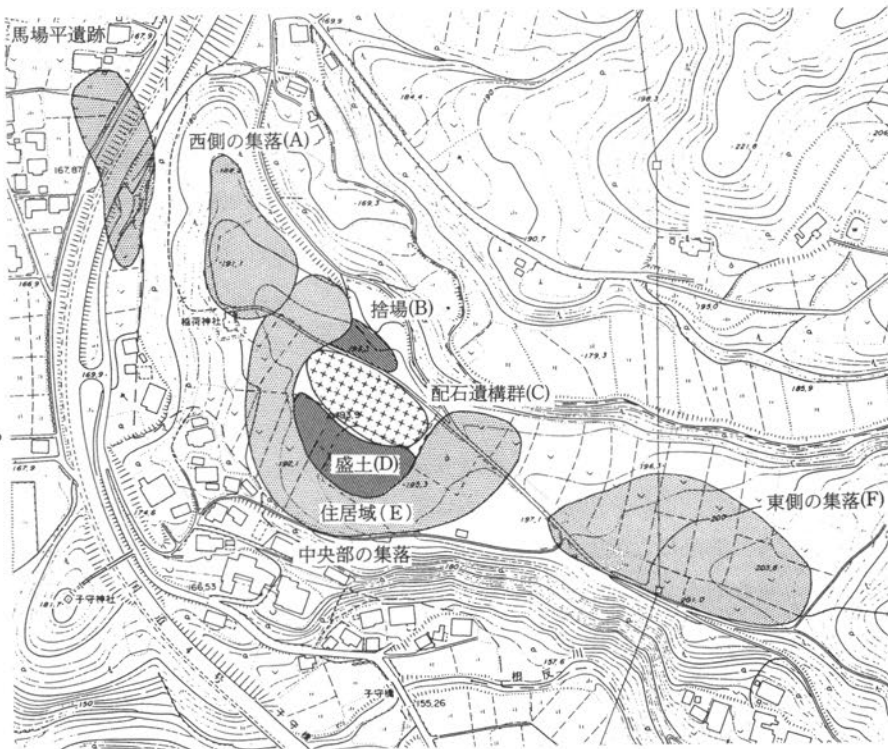
第IV期 (縄文時代中期中葉)

⑮岩手県一戸町御所野遺跡 — 弧状盛土

規模 南北約30m
東西約90m
最厚約0.7m

時期 中期後葉

内容 配石遺構の造成に伴う掘削土の盛土。石囲炉と焼土は有り。配石脇きの送り場。水平に堆積しており、常に整地していた。各種遺物が最も多く出るのが盛土。



らに広場があります。いずれも広場が一番低くて内帯部がその次に高く、盛土遺構が一番高いということになります。また、外側が少し低くなるという構造をしており、深さが少しずつちがうようになっております。これは内帯部を中心にお墓をたくさん造っております。右側の図にお墓がたくさん書いてあります。貝塚も石倉貝塚というように、三直貝塚と同様に貝塚の名前が付いていますが、貝塚についてはこの盛土と絡んでおります。例えば右側の図の右下の部分ですが、盛土遺構東側に相当しますが、U字状のものが書いてあります。それなんかが貝塚の貝層の分布状態を示しております。その上にも貝塚の貝、こちらは盛土遺構には住居は造られていないんですけども貝殻を捨てるとかいろいろな遺物、骨・炭化物・焼土といったようなものが盛土遺構の中から見つかっております。遺跡全体としては階段状のコロシム風墓地という景観が、この石倉貝塚の環状盛土遺構になります。ですから盛土遺構は結界で、ここから内側はお墓という境界になっているように思います。

図①⑦栃木県小山市寺野東遺跡。これも有名な遺跡で、非常に雰囲気はこちらの三直貝塚の盛土と似ております。元々環状であったものが、半分削られてしまったといわれております。ちょっと等高線が込み入った図になっておりますのでわかりにくいんですけども、アルファベットのCの字のような半円形で、いくつかの切れ目がやはりこちらにもありますが、全体に環状になると考えられております。こちらは最大比高差約4.4mということですからかなり高いです。今まで高いというふうには思えるのは、紹介した中では狐岱が1.5mあるということ、当時の身長が150から160cmが平均といわれておりますので、当時の人の身長と同等ということになりますと、かなり高いという例になります。狐岱と三内丸山は身長を超えるか一緒になるかぐらいになりますけれども、他は低い盛土です。この寺野東遺跡の場合は高い例になります。盛土にも高盛土と低盛土の2種類がどうもあるようです。これが一番高い例になるのかもしれませんが、完全に掘りつくしたわけではありまして、トレンチ調査で終了しているわけですが、確かにこの盛土の中には住居風のものがないことはないんですけども、あるいは焼土があつて炉ではないかといわれているものもないことはないんですけども、寺野東の場合は、三直貝塚のように明確な堅穴住居が重なって出てくるというようなことはなかったようです。ですから住むために盛土をしたとか、

日常生活にかかわる場所として盛土したのではないと思います。ある計算によりますと、真ん中の部分にはダンプカーで1,500台分の土量がそこにあったということです。中心部分を後期前半から晩期前半という長い年月、14Cの年代でいきますと約1,000年間ということですが、その間少しずつ削って盛土を高くしているという、長期的な盛土の例になります（写真の5）（67頁）。

次に図①⑧北海道恵庭市ユカンプシE3遺跡という例です。これもまだ地点を替えた発掘が行われているようですが、A地点が報告されております。ちょっとわかりにくいですが瓢箪形をした盛土遺構が少し黒塗りで示してあります。右側に集落があります。高さ35cmの低い盛土の遺構で、規模は30×14mです。後期の中頃といいますから、三直貝塚の盛土を行った時期と同じ時期になります。約80から100m³の土量になるという計算がされております。住居でいきますと8軒から10軒分ということで、これについては調査された方は、丁度その場所で見つかった堅穴住居の数と一致することを見出し、堅穴住居を掘ることによって出た土をそこに盛ったものと考えています。まさに土置き場と理解できる例です。

その次図①⑨埼玉県川口市の石神貝塚（写真の6）（67頁）。縄文時代後期、晩期、特に晩期の有名な貝塚ですけれども、後期中葉ですからこちらと同じぐらいの時期に、実は盛土もあるんだということがわかった例です。今までは貝塚部分の調査が行われていて、いろいろなものが出ていたのですけれども、盛土の部分があることがわかったのが、矢印の部分です。道路を広げて歩道を造るという工事をする際に、少し真ん中が窪んだ、周りが高くなった貝塚ですけれども、その高いところに引っ掛かるところを掘ったわけです。その断面図が図の真ん中の所に連なっており、ちょっとわかりにくいんですけども、黒い部分が盛土された部分で、約27mの長さがこの確認面ではあったということでございます。一番厚いところで70cmといわれております。これについては環状に巡るのではないかとこの意見もあるというお話を聞いたことがあります。この盛土部分では住居とか墓とかは見つかっておりませんが、いろいろな遺物が見つかっているということでございます。場所は東北自動車道と外環が接続する川口インターのすぐ東南部の位置になります。

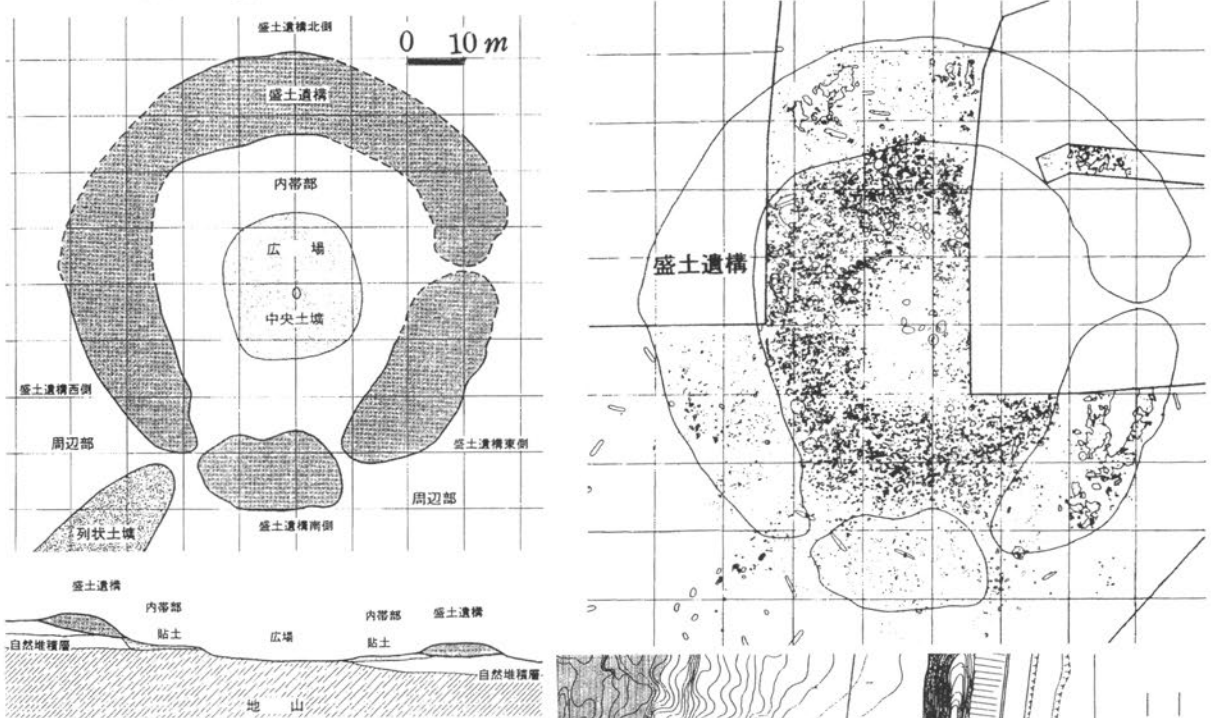
その次に図①⑩佐倉市の井野長割遺跡。これは塚状の盛土になります。直径が約30mの円形、高さ2.5m、盛

⑩北海道函館市石倉貝塚 — 環状盛土

規模 外径約82m 幅約15m 最大比高差約2.5m 3ブロック

時期 後期初頭

内容 盛土中に多量の遺物・骨・貝殻（貝塚）・炭化物・焼土。現高は元々の半分位。環状盛土の内側に土壌。中心部は一段低く、境界部に配石。外側周辺にも土壌。

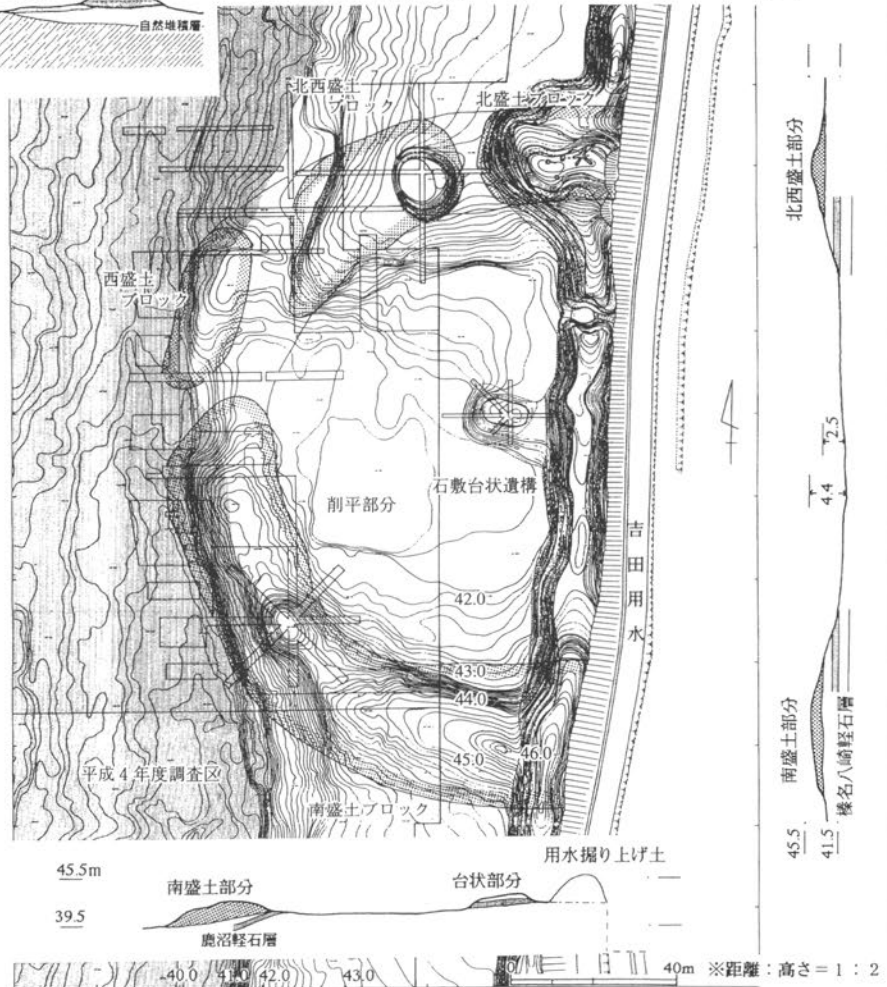


⑪栃木県小山市寺野東遺跡 — 環状盛土

規模 外径約165m
幅約15~30m
盛土と内部との最大比高差約4.4m
4ブロック

時期 後期前半~晩期前半

内容 内側を皿状に最大2.5m削る意識的な盛土。盛土上の建物は僅かにある程度。環状盛土の東半部は削られている。中心部に石敷台状遺構を残す



土の部分約1.3mということで、全体では以前は4か所ぐらいあったのではないかとわれております。2.5mですからかなり高いといえますが、ほとんど古墳のようなもので、裾に加曾利のB2という時期の土器塚があるということですから、それよりも気持ち新しい時期の塚状の盛土だという例になります。

図②①が四街道市千代田遺跡。これもやはり塚状の盛土で、20m以上の直径をもつもの2か所、高さ2mで、報告では1号墳、2号墳ということで古墳のような書き方をしております。私もこれをその昔、発掘している時見に行ったのですが、確かに古墳か塚があるんだなあと思っていたんですが、報告書の時点ではなく、つい最近ですけれども、どうも縄文時代の盛土らしいと再評価されました。先程の三直に異形台付土器が出た竪穴住居がありましたけれども、3,000年から気持ち古いぐらい前の後期の終わりぐらいから造られた盛土遺構のようです。これについては報告書で詳しい記述がありませんので、おそらく遺物はほとんどなくて土のみが高く積まれていたのではないかと思います。土を広げるのではなくて塚状に盛った例になろうかと思えます。

その次が図②②の北海道千歳市のキウス4遺跡の例です。これも先程の美々貝塚北遺跡と同じように2列平行の盛土で、北と南に分かれているという例になります。この内側に集落が展開していて、集落全体を整地する時に出た土を北や南に盛っています。私も見ましたが、一番厚いところで1mあるということでしたが、ちょっと気を付けないと見落としてしまう程度のものだったと記憶しております。ここからは石器とか異形の土器だとか遺物が大量に出ております。その東側にさらに小さい列状の盛土の遺構があります。さらにこの丸いドーナツ状のものは周堤墓という北海道独特のお墓で、その小さいものが見つっております。この後出てきますけれども、キウス周堤墓群というのが図の右上約300mの位置にございます。全体には低平な少しずつ起伏する程度の場所に集落があるという例でございます。

それから図②③群馬県安中市天神原遺跡。これは環状になるかわかりませんが、盛土の遺構が出ております。調査の範囲はその部分だけですから、よくわかりませんが、その内側に墓地があって、墓地を掘削する土を斜面のはじまるところ、台地の縁に残土として巡らしています。調査者は周堤帯という名前です。竪穴住居とか墓はその場所にはないという例にな

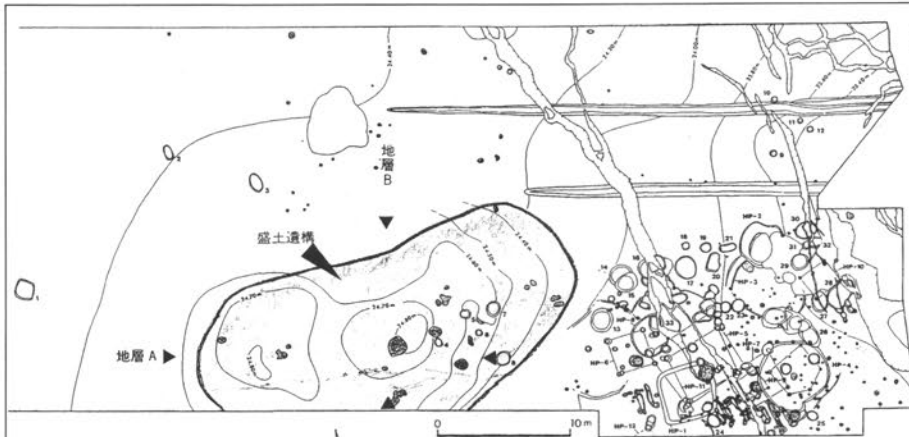
ります。これは後期の終わりから晩期のはじめということですよ。

その次に図②④番、北海道深川市音江遺跡。この遺跡は音江の環状列石として古くから有名で、直径4から5mの小さな環状の配石が13基、点々と列んでいます。その一部を40m強の方形の盛土が囲んでいます。その右側にわかりにくいですが、断面図があります。よく見ていただくと2か所高まり部分が表現されております。おそらく真ん中の部分を削ってその周囲に土手状に盛土しているのでしょう。

その次に図②⑤千歳市のキウスの周堤墓群です。北海道は周堤墓群が後期後半にたくさん造られるわけですが、日本一大きいのが2号周堤墓で矢印で示したものです。これについては発掘はほとんどされておられませんので詳しい内容は、部分的なものしかわかりませんが、土手の円周が150mになり、高さは5.5mあります。やはり内側の部分を削って周りに高く盛土を施すというもので、十数基ここに密集しています。2号の土の量は約3,000m³という計算がされております。先程の標準的な竪穴住居の300軒分という膨大な量が盛土されております。ただ、真ん中だけでこのような土の量が足りるのかどうか、近いところも削っているのだと思いますけれども、それにしても膨大な量が盛土されております。これは完全にお墓として使うもので、真ん中の部分と場合によっては周りの土手の高い部分にもお墓をつくるというものでございます。ここもさびしいところで、墓地とはこういうところかと思うようなところですよ（写真の7）（67頁）。

それから図②⑥三内丸山遺跡の急斜面盛土と書いてありますけれども、先程の北の盛土のさらに北側に沖館川という川が流れております。運転免許センター側に谷があるわけですよ。その谷の部分にまずは図の太線よりも下の部分が前期の層になるんですが、土器がたくさん入っている。この層については土器とか排土の処分場として少しずつ捨てられていたと考えられております。太線より上の部分については積極的に短期的に平坦地を造成しようという意図で盛土されたのだという評価がされておられ、竪穴住居がその上に造られているとのことですよ。三内丸山遺跡は広い土地があるにもかかわらず、斜面を盛土してまでその上に住居を造っていたことになります。

それから図②⑦宮古市崎山貝塚。海は見えませんが、この図はドーナツ状になっておられますが、右側の方が海で、左側の方が山側になるわけですよけれど



⑱北海道恵庭市ユカンボシ

E3遺跡 — 不定型盛土

※C地点にも有り

規模 A地点:

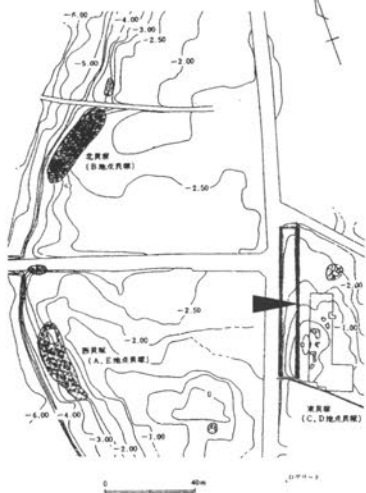
南北径約30m

東西径約14m

高さ約35cm

時期 後期中葉

内容 竪穴住居の排土の捨場。土器・石器の廃棄場としても使用。竪穴排土と盛土の土量約80~100m³(上屋真一氏計算)

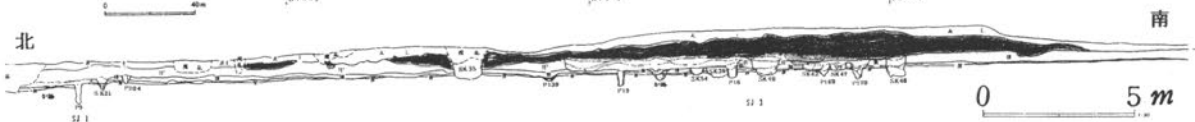


⑲埼玉県川口市石神貝塚 — 带状盛土

規模 報告分: 最大厚約0.7m 最大比高差約1.7m

時期 後期中葉

内容 報告分の盛土は带状で、盛土に住居・墓は無いが、土器・石器・獣骨・炭化物・焼土遺構が発見されている。環状に巡るといふ意見もある。

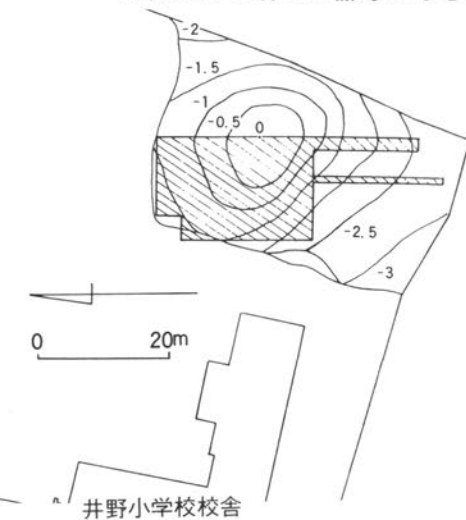


⑳千葉県佐倉市井野長割遺跡 — 塚状盛土

規模 直径約30mの円形 高さ約2.5m 厚約1.3m (全部で4基以上?)

時期 後期中葉~晩期前半

内容 盛土からは土器・石器・土偶・耳飾りなどが発見されている。裾に加曾利B2期の土器塚がある。

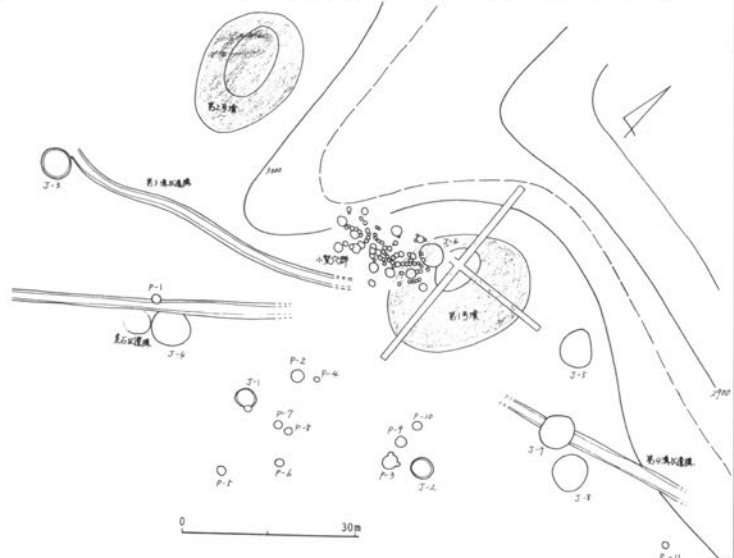


㉑千葉県四街道市千代田遺跡 — 塚状盛土

規模 直径約26~20mと約24~17mの楕円形の2か所 高さ約2m

時期 後期末~

内容 盛土からは土器が発見されている。報告書は第1号墳・第2号墳とする。

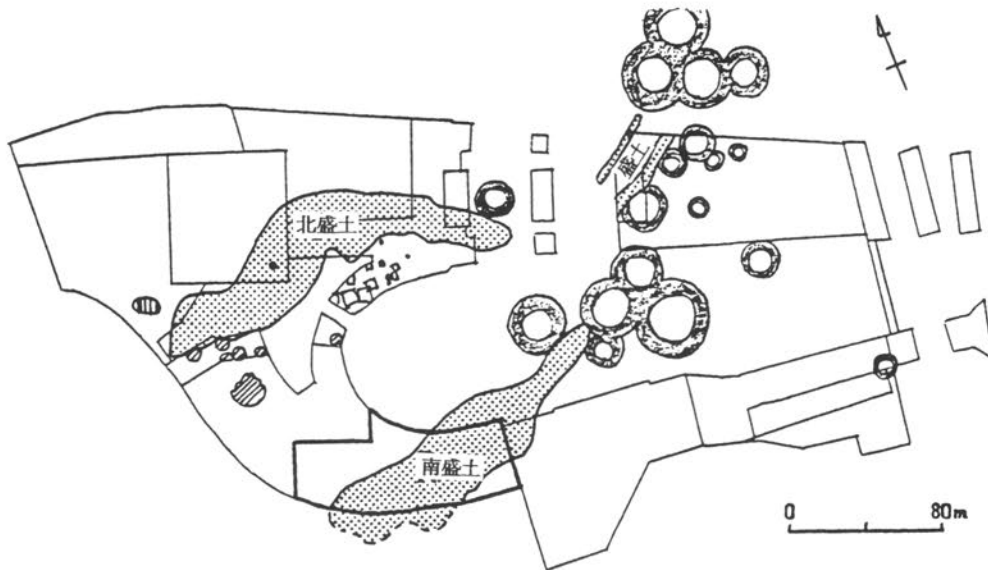


②北海道千歳市キウス4遺跡 — 二列並行弧状盛土（他に小さな二列並行帯状盛土有り）

規模 最大：全長約190m 最大幅約40m 最大厚約1m

時期 後期後葉

内容 住居域の整地土を南北に盛る。大量の遺物が盛土から出土。北盛土の平均層厚は約30cm
 ⇨土量約225m³（佐川俊一氏計算） 東側に周堤墓が19基あり、その先約300mにキウス周堤墓群がある。

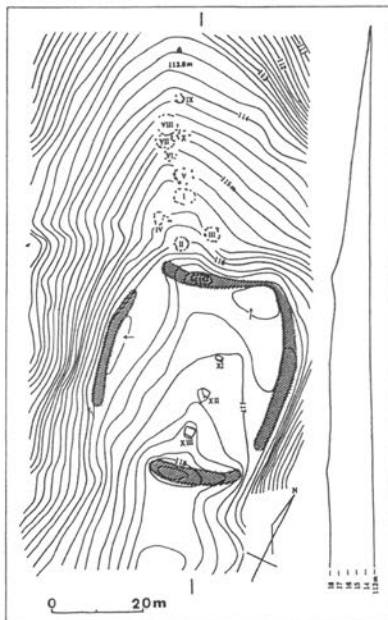
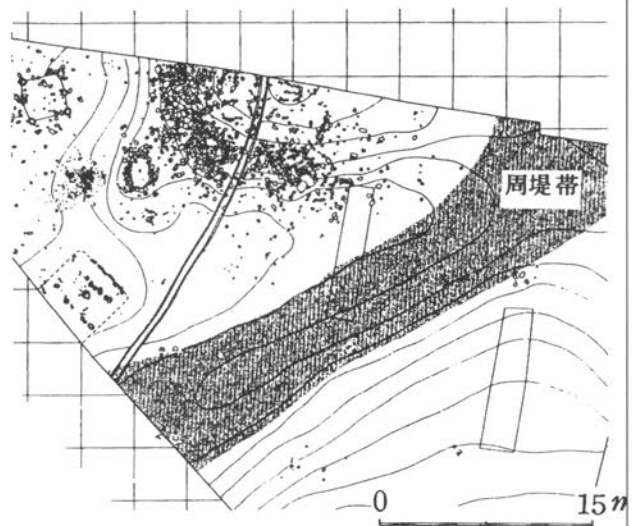


③群馬県安中市天神原遺跡 — 環状？盛土

規模 報告分：長さ約40m 幅約10m
 厚さ約0.7～0.5m

時期 後期後葉～晩期初頭

内容 墓地掘削の残土という。盛土には竪穴
 住居跡・墓は無し。周堤帯と呼称。



④北海道深川市音江遺跡 — 方形盛土

規模 長径約46m 短径約42m 幅1.5
 ～4m 角3か所の土手が切れている。

時期 後期

内容 中央を平坦造成。削土を方形に盛土。
 下に土壌をもつ直径4～5mの環状配石
 13基がほぼ1列80mに渡り分布。環
 状配石は方形盛土内3基、外に10基。

㉔北海道千歳市キウス周堤墓群

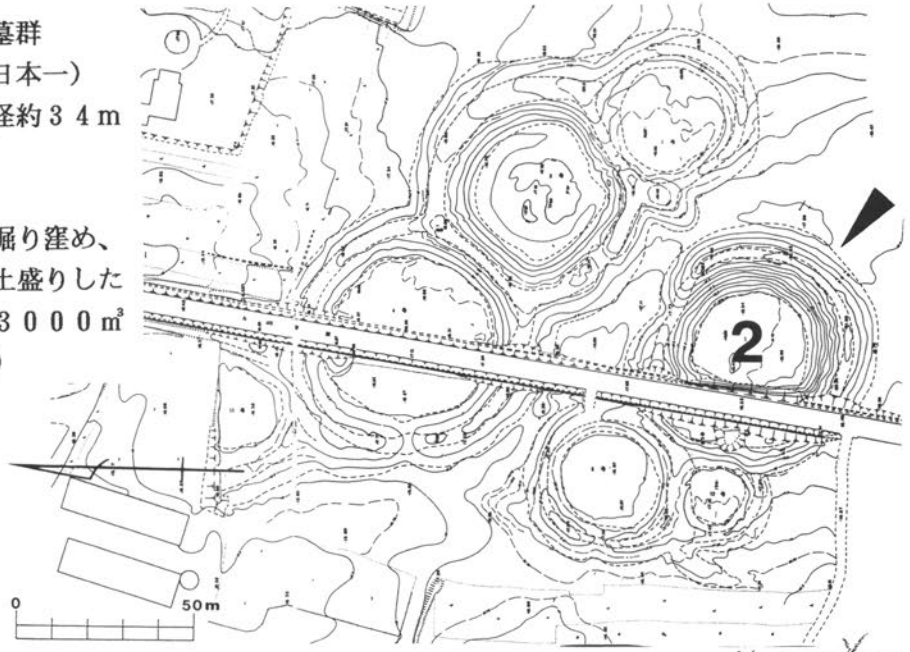
— 2号周堤墓（大きさ日本一）

規模 外径約75m 内径約34m

土手高約5.5m

時期 後期後葉

内容 中央を円形平らに掘り窪め、
周囲を円形堤状に土盛りした
墓地造成。土量約3000m³
(大谷敏三氏計算)

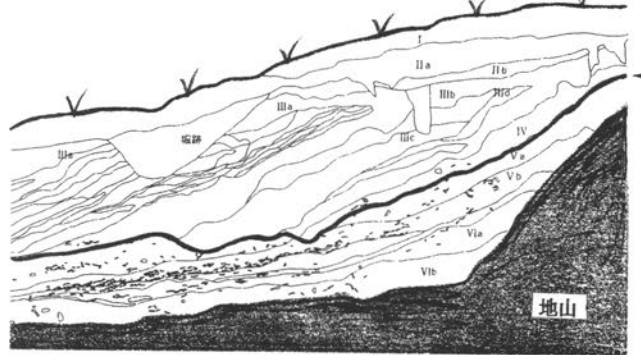


㉕青森県青森市三内丸山遺跡 — 急斜面盛土

規模 厚さ3~4m 広さ20~30m

時期 中期

内容 沖館川に面した北西斜面に、前期では土器や排土の処分場としていたが、中期になると盛土により積極的に平坦地を造成し、直ちに、その上に竪穴住居を建築。



㉖岩手県宮古市崎山貝塚 — 環状区画溝・急斜面盛土

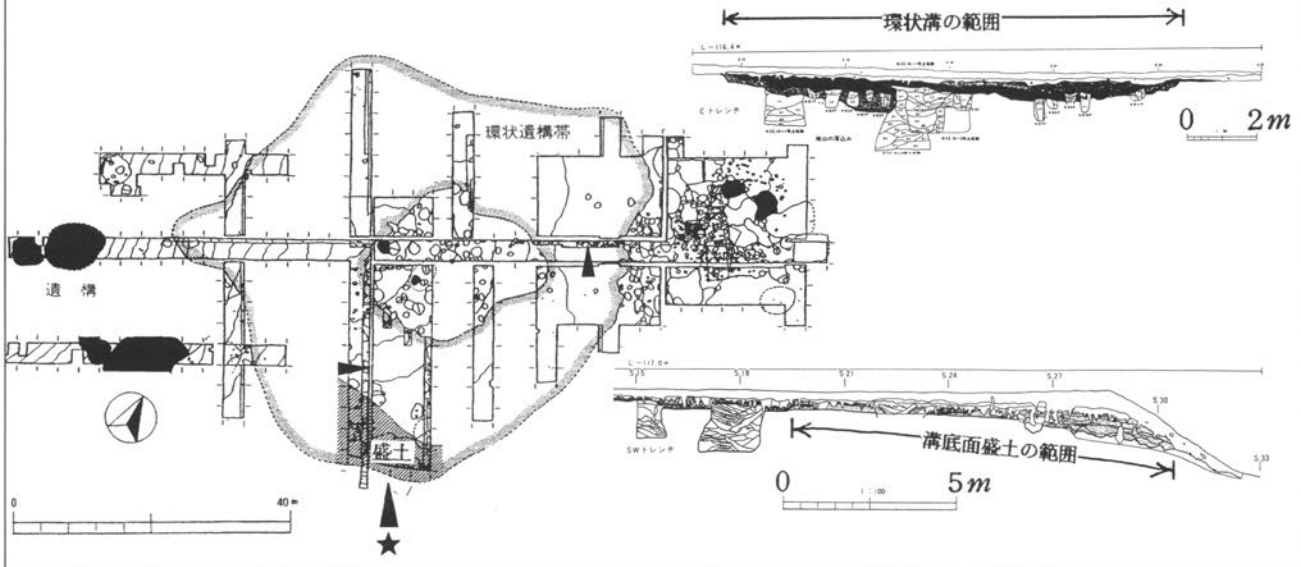
規模 中央広場：長径26.7m・短径21mの不整楕円形 面積約350m²

環状区画溝：外径南北約60m・東西約55m 幅13.2~25m 最深約1m

盛土幅：約4~12m 最大厚約0.7m

時期 中期後葉

内容 中央広場を巡る環状区画溝。台地南側斜面肩の一部を盛土し溝底面を拡幅造成。立石と墓のある中央広場と居住域を分け隔てる空間区画を意図しているという。



も、南と北側が斜面になります。ドーナツの上の部分が斜面、ドーナツの下の部分も斜面、細い尾根状の中央部分ぎりぎりにドーナツ状の溝があるというように見ていただきたいと思います。ドーナツ状の中心部分にお墓を造り、そのお墓の部分を残してドーナツ状に溝を掘っていて、その東側、西側に集落があるという遺跡でございます。円形区画溝という環状区画溝になるわけですけれども、その溝の南側に一部斜面にかかってしまう部分がありますけれども、その斜面の部分に溝を掘ると斜面ですから溝がさがってしまうので、その部分に盛土をして溝の底を高くしているという変わった例でした。私も行って聞くまではよくわかりませんでした。溝の高さを均一にするような行為を縄文人が行っていたということです。その盛土の部分の断面図が右の図の下の方の図で、溝底面盛土の範囲という矢印で示した黒い部分が盛土した部分、高くない盛土といいますか、低い盛土になります。溝自体はその上の図にあります黒い部分のところに溝として掘った部分があります。

その次の図⑳以降は、新潟県朝日村元屋敷遺跡で、サケの昇る川として有名な村上市の三面川の最上流域、奥三面にあります。これについてはいままでと少し違う例ですが、集落の中を改修する工事の例として紹介いたします。上の地図は全体図です。まず川が斜めに右下の方から左上に流れております。川の南側に集落がありまして、埋甕ブロック1とか6とかいうところに集落があります。ここは低い段丘になっております。右側に配石墓群と書いてありますお墓の部分があります。その下を見ますと黒い部分に縦線がありますが、川1とか川2とか書いてあります。川2は川2と書いてある部分から水が湧きだしまして、へ字の左側に流れている川です。次に川1と書いてあるのが真っ直ぐ北にのびている川に表現されています。川1の部分に道路状遺構と小さい字で書いてありますが、本来川1はそちらへ流れていました。真ん中左の後期前半までの流路と書いてある図のように川1はつ字形にまわって川2に注ぐ川だったのですが、その後、右の図のように後期前半以降に真っ直ぐ延ばして大きな川のほうに落とすという流路変更を行っています。川1の流路変更する前というのは集落の南側の高い部分を川が流れている格好になりますので、浸水を防ぐため堤防の盛土を行っているということが指摘されております。その後、川を北に付け替える際に、元の川の部分については砂利敷きの舗装工事を行って

て、それが一番下の図になります。窪んだ部分が元々あるわけですから、そこに砂利を入れ、両側を大きな石で縁取りをするというような感じで道にしているというものです。その付け替えられて真っ直ぐになった川にもやはり護岸工事をした例が見つかっています。10cm内外の石と砂利を四列に並べて護岸工事をしています。また、三内丸山遺跡には北の谷にある道の斜面に擁護壁が造られています。2mぐらいの栗材の杭を打って、現在の土嚢袋に相当するように円筒の土器をそこ並べおいて、土が崩れないようにして、斜面の道を造っています。

工事系の例として紹介いたしました。

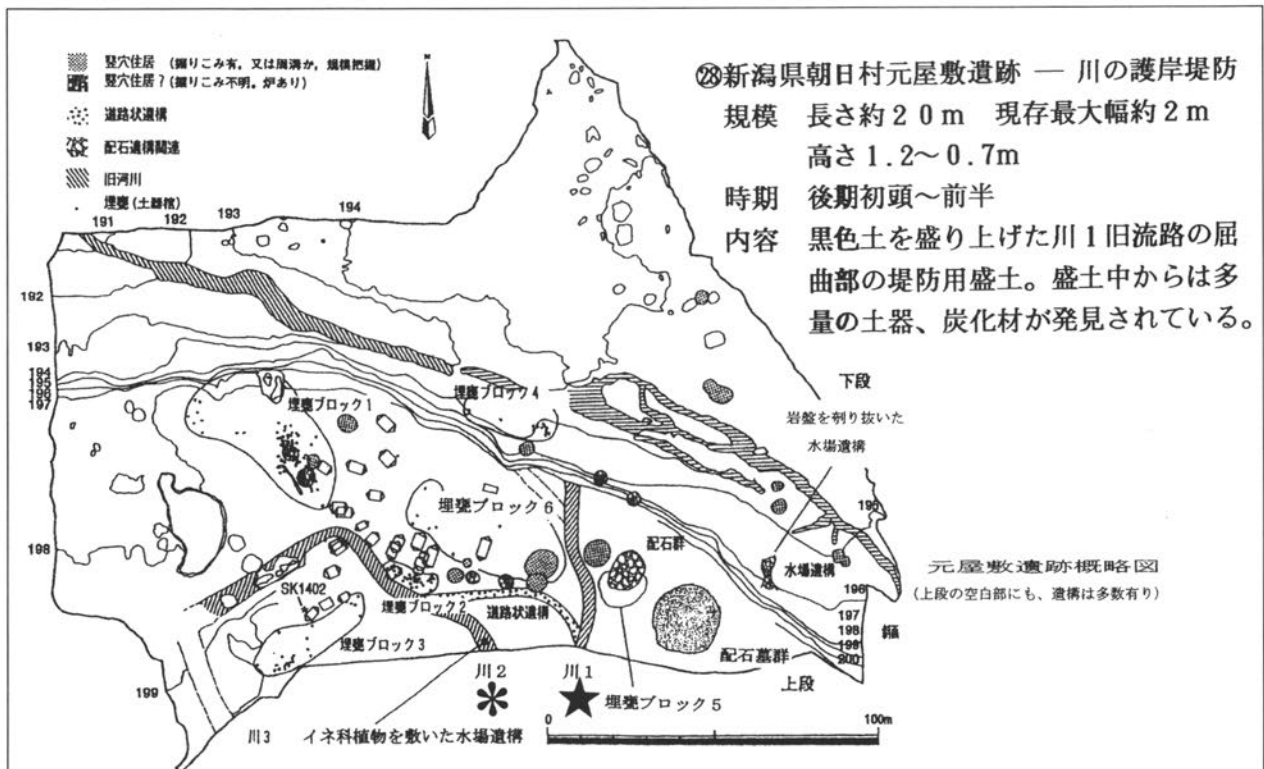
最後に土木工事とは関係はないものですが、三直貝塚でも出ました斜面に竪穴住居を造る例があります。千葉県でも後期前葉の例が増えています。斜面に家を造るという例が、三直貝塚だけではなくて北海道とか東北北部に多くあるようです。

時間がだいぶ過ぎましたので、三直貝塚について若干話して終わりにさせていただきたいと思います。

先程までのやり方で、三直貝塚の盛土を紹介すると、どうなるかというのが資料4で、「千葉県君津市三直遺跡（貝塚）の盛土」としてまとめられるのかと思います。おそらく、造成工事自体は後期の中ぐらいに一気に行って、削り残しの部分を斜面の部分に少し残しまして、斜面に土を落とすとともに縁のところに盛土を施すということをやっていると思います。その後、その盛土の上に後期の後半の人になるかと思いますが、家をつくる、それが晩期前半まで続くというのが集落としての後半の部分になります。前半の部分は、斜面の部分だけ家が残っておりまして、斜面の上にあたる場所の住居とか遺物とかについてはみんな破壊されて押し流されているのではないかというのが、私の見た感想でございます。これについては後で報告をされる時に検討されて正式にどういう状況か発表されるかと思いますが、あくまでも私が見た感じでは、

住居はあるんですけども盛土にはどうも積極的にお墓を造るということはなさそうですので、墓と思われるものが多少あるのかもしれませんが、お墓を別の地点に本格的には造ったようで、墓地をここに造るというようなことはなかったと思います。

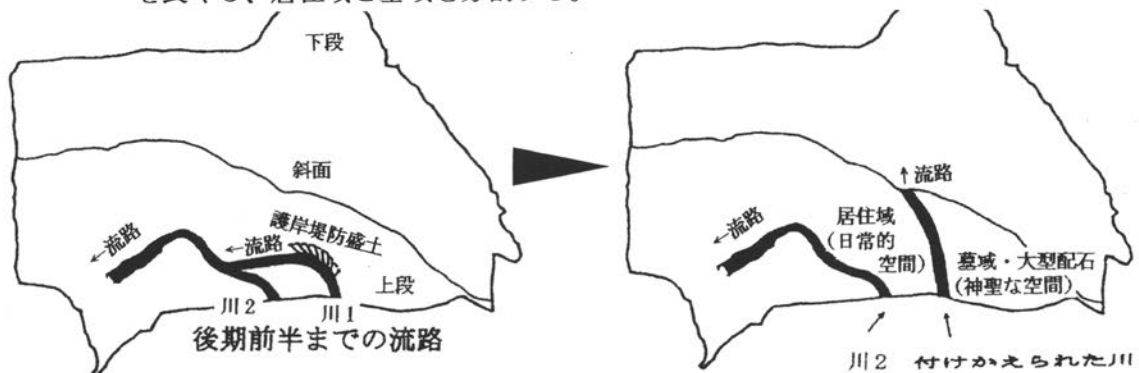
盛土をする時期に貝塚を一方では造っているわけですが、貝を盛土に関係させないということが非常に興味深いところでは。というのは加曾利貝塚をはじめ真



③新潟県朝日村元屋敷遺跡 — 人工河川の掘削（流路変更工事）と護岸工事

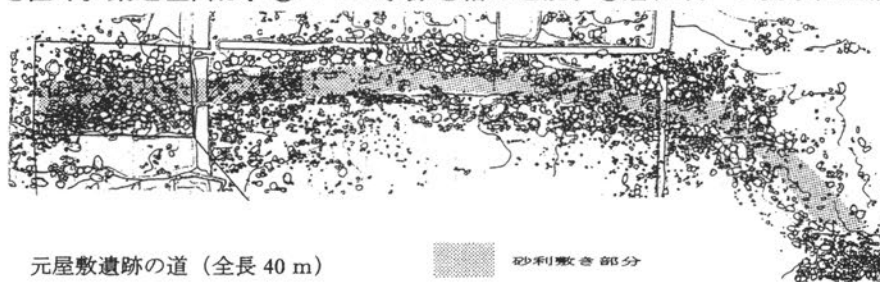
掘削：規模 現存長約40m 幅3~5m 深さ0.3~0.7m
時期 後期前半以降何度か
内容 川1を真っ直ぐにして集落の水はけを良くし、居住域と墓域を分割する。

護岸：規模 両岸、長さ約10m
時期 晚期中頃
内容 10cm内外の礫・小砂利を敷き詰め、保存良好部は石を4列並べる。



④新潟県朝日村元屋敷遺跡 — 砂利敷き道（旧河川流路跡を利用）

規模 全長約40m 幅2~2.5m
時期 後期前半
内容 地面を約50cm掘る⇒大きく偏平な石を置く⇒砂利を詰める⇒道路面の両側に大きく偏平な石を置く。築造理由は、①二つの水源を結ぶ道説、②居住域への流水阻止説の2説。



ん中が窪んだ中央窪地型馬蹄形貝塚というのは、縄文時代で考えれば白い土手状のドーナッツがあると思っただけであればいいと思います。三直はそういう配色をしなくて、あくまでも黄色い土を盛るだけで、白いものは斜面に捨ててしまっているということです。形状は馬蹄形貝塚と同じ集落景観なんですけれども、片方は白い部分に家が建っている、片方は黄色い部分に家が建っているということで、モノクロでいきますと同じなんですけど、カラーでいきますと全然イメージが違うというのが三直貝塚の盛土の特徴になるかと思っています。

いろいろな祭祀関係の遺物が出ていて、この会場にも幾つか展示されておりますが、異形台付土器がやや多いのかなという印象はありますが、山形土偶が見当たりません。また、吊手土器とか柄香炉型土製品などは出ていないように見えますので、それなりに祭祀関係の遺物は出ておりますが、三直貝塚は特に多いということを感じさせるものではないかと思いません。ですから普通の当時の集落の営みがそこにあったんだろうということで、祭祀集落であるというようなイメージは抱かない方がいいと思います。あくまでも聖なる場所として造成したのではなくて、実利的に広い空間を確保したいという目的で集落の造成工事を一気にやっているのではないだろうかと思われまます。造成工事はそれで終了するのだと思われまますけど、堅穴住居の覆土をロームで修復をするということをあえてやっているというのがその後の特徴的な行動になります。これが黄色を意識しているのかなあとというふうに見える行動につながるかと思ひます。そのように感じました。

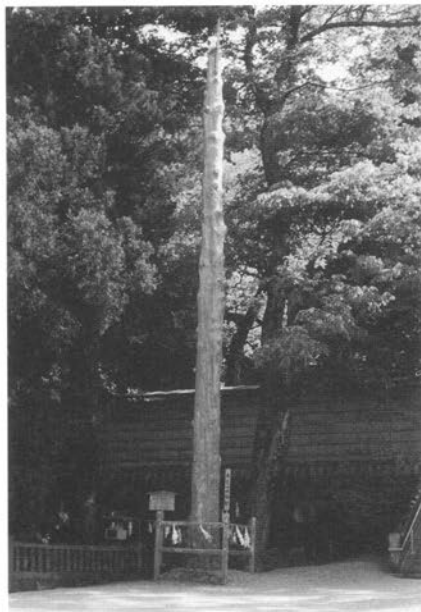
資料5の「盛土の分類」は、今回試案的に作ったものです。盛土もいろいろ見てきましたが、排土の出ない集落はないので、家を造ったり、お墓を掘ったり、それから集落を平らにするとかというときに出る排土、つまり出てしまったからしょうがないという排土と、わざわざ削るといふ、たとえば山を削って平らにするんだという排土と、土の由来として大きく二通りに分けられるかと思ひます。それから目的別に分けると、お墓にしたりとか、あるいは宅地にしたりとか、それ以外の区画、結界などの聖地としての意味があるのではないかと思ひますが、土の由来は別としても意識にも幾つかの区別があるのかと思ひます。それらがそこに書いてあるように分類できるのかなあと思ひます。

資料5の真ん中のところの表ですが、「盛土形成の

長短・消積極別分類」という題を付けましたが、①から④まで分かれております。消極的短期的には断続的に土が出て、例えば堅穴住居を掘ったとき土が出るというようなものをぼつぼつ捨てるものです。遺跡を掘りますと時々捨て土と考えられるようなものが出ますが、そういうものが該当します。それを意識的に盛るか、別に意識しないで適当に捨てるかの違いも見ないといけないのかということが今回の分類の基本になります。短期的と長期的というのは短時間でやるものと時間をかけてやるものがあるという点ですが、これは遺物の出た時期で識別できるかと思ひます。それから、積極的に切土して盛るといふことなんですけど、盛土に関しては形態的には帯状、環状、囲状という例があるわけなんですけど、環状の場合でも三直貝塚のように墓ではないものと、石倉貝塚のように墓の輪郭を造って結界とするものがあります。周堤墓の場合も結界を形づくるとともに、人があふれた場合には中央部分ではなくて土手状の部分にもお墓を造るといふ例があります。このように環状に盛るといふ意味にもいろいろあるということです。長期的な切土系には寺野東の例があります。長い時期にわたって盛土の行為を繰り返しているということによって、できているという例になります。そういうことで、盛土の作業の意識にはいろいろな分類ができると思ひます。それを日常的な部分、ケの作業といひましたけれども、それとわざわざやる部分、ハレの作業といふ、これを見分けるのはなかなか難しいと思ひます。いくつかだぶっておりますけれども、そのようなものを①から④にあわせると表のようになると思ひます。

資料5の「盛土に住居を多数造っている遺跡」はいままでどのような例があるのか調べましたところ、この程度しかなさそうだといふことで、これからもう少し調べればもっとあるのかもしれませんが、とりあえずははっきりわかっているのはこの3か所です。

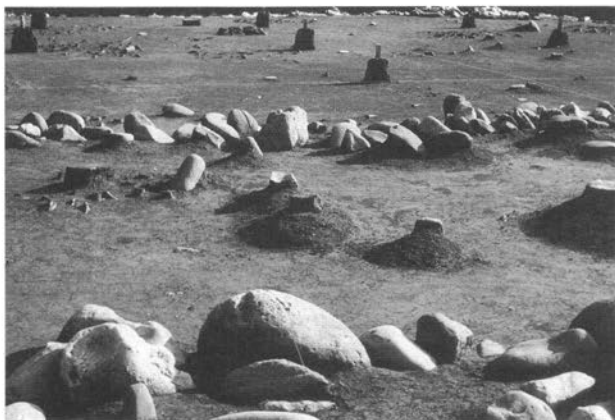
1番目、秋田県森吉町狐岱遺跡。これについては先程図にあったとおりです。前期の後葉ということになります。同じく秋田県二ツ井町鳥野遺跡。これは中期後葉大木8bといふ、関東では加曾利E2式といふ時期になるかと思ひますが、二列の帯状の土手があり、先程のキウスの4だとか、美々貝塚と同じような帯状をなして、土手状の上に住居を造っています。これらの秋田県の例は報告がなされていないようですので、それ以上のことはわかりません。3番については現在調査中の今日話題の中心である三直貝塚です。加曾利



1. 長野県諏訪大社の御柱



4. 秋田県大湯遺跡 整備後の万座環状列石



2. 秋田県伊勢堂岱遺跡 環状列石Cの近景



5. 栃木県寺野東遺跡 外側斜面の盛土断面



3. 青森県小牧野遺跡 中心帯から山側の内帯・外帯を望む



6. 埼玉県石神貝塚 道路の外に残った盛土



7. 北海道キウス周堤墓群 2号周堤墓の内側

★千葉県君津市三直貝塚 — 斜面盛土を伴う環状？盛土

規模 現存長約140m 幅約10～20m 最大厚約1.5m 内側との最大比高差約1.8m

時期 後期中葉

内容 旧集落を大きく一気に削土した土で斜面上部と平坦になった台地の縁辺部を盛土し、竪穴住居を建築。西半部は藪で不明。後期中葉の貝塚は盛土に関与せず。

(1) 三直遺跡の観察

(1)ローム層の削平，斜面を含む削平面上への盛土が一気に実施されている。

残土や排土の集積とは考え難く，意図的な掘削を経た盛土である。

(2)盛土上での建物建築は盛んであるが，埋葬用と考えられる土壌は発見されていない。

埋葬場所は別地点と考えられる。

(3)食べかすの貝殻の拾場は，同時期進行の盛土形成と関係せず，別の斜面で完結させている。

東京湾沿岸下総台地の中央窪地型馬蹄形貝塚は貝殻の環状の土手といえるから，似て非なるものといえる。

(4)西半部は藪で不明であるが，西貝層が斜面貝層であれば，地形的に環状とは認めがたく，DもしくはC字状となる。斜面貝層でなければ環状盛土の可能性を有するが，その場合の西貝層は中央窪地部に位置することになり，類例の無い事例となる。

盛土は環状をなしていたかは微妙。無花果型？か。

(5)盛土形成時における活発な祭祀行為の兆候は認められない。また，その後の祭祀関係遺物の出土状況は，他の集落と何ら異なる所はない程度である。

盛土形成後の祭祀に特異な点は認められない。

[祭祀関係の出土遺物 = 異形台付土器・木菟形土偶・遮光器系土偶・土版・石剣]

(2) 三直遺跡の盛土の性格

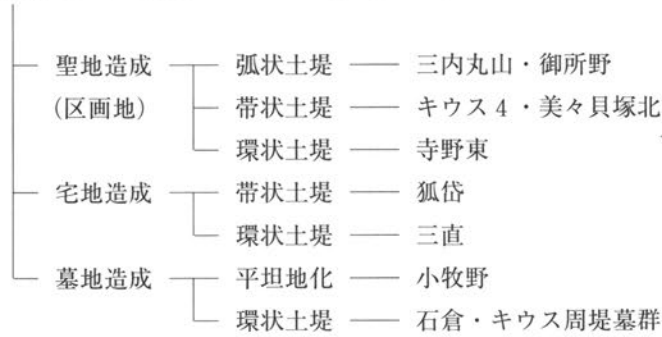
聖地（送り場）を造るために盛土するという意識は認められず，地形改変により集落を造成するという実利的な土木工事である。

平坦地を造成して集落の広さを確保するのが削平の目的と考えられる。そして，中央窪地型集落の景観に似せ，周縁部を盛土により土堤とし，住居をその高まりの上に建てる集落景観を創生したものである。

盛土の分類

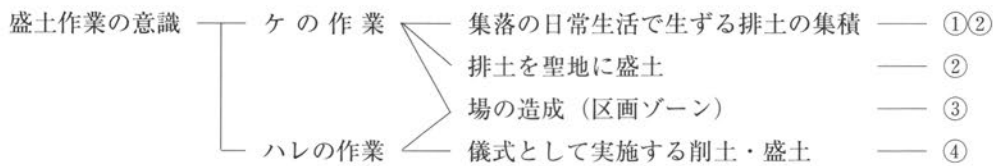
資料 5

- (1) 形態分類 —— 考古学的な遺構別による分類 —— 盛土
- (2) 行為別分類 —— 土の由来差による分類 —— 排土系盛土・切土系盛土
- (3) 目的別分類 —— 意識差・利用差による分類 —— 排土置き場・墓地・宅地・聖地 (区画地)



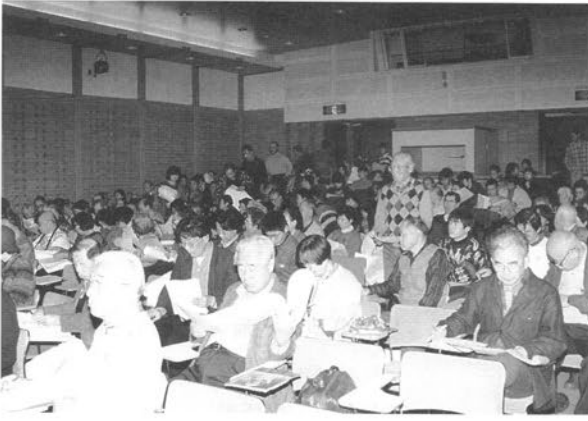
盛土形成の長短・消積極別分類

	短 期 的	長 期 的	
消 極 的	排土非集中処理：多数の遺跡 竪穴住排土集中処理：ユカンボシE3 ①	排土処理→急崖：三内丸山北斜面盛土 排土処理→聖地：三内丸山盛土 墓地排土処理→縁辺・区画：天神原 ②	排土系
積 極 的	整地・平坦化：小牧野 弧状土堤：御所野 带状土堤：狐岱・キウス4・美々貝塚北 環状土堤：三直・石倉・キウス周堤墓群 囲状土堤：音江 環状溝補修：崎山 ③★場の活用を目的とする一気造成	環状土堤・聖地：寺野東 ④★盛土・送り行為に意味をもつ長期造成	切土系



盛土に住居を多数つくっている遺跡

- 1. 秋田県森吉町狐岱遺跡 前期後葉 (円筒下層d式) L字带状
- 2. 秋田県二ッ井町鳥野遺跡 中期後葉 (大木8b式) 二列带状
- 3. 千葉県君津市三直遺跡 後期中葉 (加曾利B2式) 環状?



B2式と書いてありますが、私が見た限りこの時期にどうも一齐に工事を行って、後は修復工事を行っている程度かなあと考えています。環状になるかどうかについても西側がわかっていないようですので？だと思います。環状か弧状か、あるいは瓢箪形かよくわかりませんが、そういうものが見つかっているという意味では全国的にも有数の、めったにない遺跡であります。縄文時代の生活を考える場合、集落はそれぞれ遺跡ごとに個性がすごく大きいなということを、同じような感覚で括れないなということを改めて考えさせてくれた遺跡です。生活をしている人達がそれぞれ違うわけですので、遺跡もそれぞれ違うわけです。三直貝塚の場合は山の上を削って集落景観を造るという大土木工事をした人達なんですけれども、本当のところは何なんだと私は聞いてみたいと思っているぐらいですが、みんなで力を合わせてこういう工事をやろうと決断し実行したエネルギーを三直貝塚を見学した時に感じた次第です。

時間もかなりオーバーしてしまいましたので、まだ説明が足りない部分も多々ありますけれども、会場の都合もあろうかと思っておりますので、このへんで終わりにさせていただきます。

(会場から盛大な拍手)

掲載図の出典

①山形県米沢市一ノ坂遺跡

米沢市教育委員会 1996「一ノ坂遺跡」

②北海道南茅部町大船C遺跡

阿部千春 1997「北海道南茅部町大船C遺跡」『考古学ジャーナル』425号

③石川県金沢市チカモリ遺跡

金沢市教育委員会 1983「金沢市新保本町チカモリ遺跡-遺構編-」

④青森県青森市三内丸山遺跡

株式会社大林組広報室 1996「縄文」『季刊大林』No.42 一部改変 [掲載承諾済]

⑤北海道苫小牧市静川16遺跡

苫小牧市教育委員会 1983「静川16遺跡-縄文時代の環濠と集落-」 一部改変

⑥北海道千歳市丸子山遺跡

千歳市教育委員会 1994「丸子山遺跡における考古学的調査」千歳市文化財調査報告書XIV

⑦⑧秋田県鷹巣町伊勢堂岱遺跡

鷹巣町教育委員会 1997「伊勢堂岱遺跡から縄文の世界を考える」 一部加筆

⑨青森県青森市小牧野遺跡

遠藤正夫 1998「縄文の心象世界を探る」『市史研究あおもり』1 右図：加筆, 改変

⑩秋田県鹿角市大湯遺跡

小林達雄編 1995「縄文時代における自然の社会化」『季刊考古学』別冊6

⑪北海道小樽市忍路遺跡

駒井和愛編 1959「音江」

⑫北海道千歳市美々貝塚北遺跡

高橋正勝 1993「北海道千歳市美々貝塚北遺跡」『日本考古学年報』50

⑬秋田県森吉町狐岱遺跡

小林達雄編 1995「縄文時代における自然の社会化」『季刊考古学』別冊6 加筆

⑭青森県青森市三内丸山遺跡

岡田康博 1998「東日本の縄文文化」『季刊考古学』64 加筆

⑮岩手県一戸町御所野遺跡

一戸町教育委員会 1993「御所野遺跡I」

⑯北海道函館市石倉貝塚

函館市教育委員会 1999「函館市石倉貝塚」右図：一部改変

⑰栃木県小山市寺野東遺跡

小林達雄編 1995「縄文時代における自然の社会化」『季刊考古学』別冊6 一部改変

⑱北海道恵庭市ユカンボシE3遺跡

ユカンボシE3・E8遺跡調査団 1992「ユカンボシE3遺跡A地点 ユカンボシE8遺跡B地点」加筆

⑲埼玉県川口市石神貝塚

上図：江原 英 1999「寺野東遺跡環状盛土遺構の類例」『栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター研究紀要』7 加筆

- 下図：埼玉県埋蔵文化財調査事業団 1997 「石神貝塚」 加筆
- ⑳千葉県佐倉市井野長割遺跡
佐倉市教育委員会・佐倉市遺跡調査会 1974 「井野長割遺跡」
- ㉑千葉県四街道市千代田遺跡
四街道市千代田遺跡調査会 1972 「千代田遺跡」 加筆
- ㉒北海道千歳市キウス4遺跡
北海道埋蔵文化財センター 1998 「古代の夢だより」 4 加筆
- ㉓群馬県安中市天神原遺跡
江原 英 1999 「寺野東遺跡環状盛土遺構の類例」 『栃木県文化振興事業団埋蔵文化財センター研究紀要』 7
- ㉔北海道深川市音江遺跡
駒井和愛編 1959 「音江」

- ㉕北海道千歳市キウス周堤墓群
朝日新聞社 1997 「三内丸山遺跡と北の縄文世界」 『アサヒグラフ』 別冊 千歳市埋蔵文化財センター提供資料 加筆
- ㉖青森県青森市三内丸山遺跡
青森県教育委員会 1997 「三内丸山遺跡Ⅷ 第6鉄塔地区調査報告書」 加筆
- ㉗岩手県宮古市崎山貝塚
宮古市教育委員会 1995 「崎山貝塚－範囲確認調査報告書－」 加筆
- ㉘・㉙・㉚新潟県朝日村元屋敷遺跡
朝日村教育委員会 1999 「平成10年度奥三面遺跡群報告会資料」 加筆

[付言：文中の写真は堀越正行氏の撮影によるものである。]

〈企画担当：資料課 西川博孝〉